私と年下王子サマ

橘　亜衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私と年下王子サマ

【Ｎコード】
Ｎ６９１６Ｚ

【作者名】
橘　亜衣

【あらすじ】
私の名前は香山絵里（２１）。ある日現代から異世界に飛ばされて、とある貴族の家にお世話になっていた私に、突然結婚話が持ち上がった。だけどお相手はなんと、１４歳の王子様！王族、とか、王子様、とか、結婚とか以前に、１４歳！？ってことは、中学生！？７歳も年下の旦那様だなんて、絶対に無理！！！かといって断ることもできず、私は王子のもとに嫁ぐことになりました…。

00　親愛なるお兄様へ

『拝啓、日本のお兄様。』

私があなたの元を去って2年経ちますが、元気にやっていますか？
私はそれなりに元気にやっています。

2年前のあの日、大学の講義中にうたた寝をして、気付いたら異世界に飛ばされてた時はどうしようかと思ったし、これは夢だと必死に現実逃避もしました。

だけどそれは現実で。

知らない世界で生きる術のない私は途中、人攫いにあったり知らないおじさんに売られそうになったりしたけど、今は心優しい人達に拾われて、幸せに暮らしています。

拾ってくれたのはとある国の貴族の方で、子供がいなかった2人は私を実の娘のように可愛がってくれています。

幼いころに両親を亡くした私にとって、2人は間違いなく私の父親と母親という存在です。

いつかお兄様にも会ってほしいと思うけど、やっぱり住む世界が違うから無理ですよね。

文字通り、世界、違うから。

そんな両親同然の2人のお願いに、私がどうして断れるでしょう。
実はこの世界、それなりの地位のある人は、２０歳までにしかるべき相手に嫁がなければならないという決まり事、のようなものがあって。

如何せん、私の家はこの国でも有数の大貴族。

いくら私が養子で、実は異世界出身だといっても、結婚はしないといけないみたいです。

異世界生まれはともかく。もう２０歳過ぎてるんですけど、いいんですか？
なんて聞いたら、あなたは幼く見えるから大丈夫。と笑顔で言われました。

確かに、日本で大学生やってた頃から中学生に間違われるほどの童顔幼児体型だったけど。そしてそれから2年経った今とその頃と、大して変わっていないけれど。

…喜んでいいのか、正直微妙なところです。

どうやら私、１７歳で通っているらしく、相手方にもそれで話をしているから、と言われました。

うん、まあいいんですけど。
考えようによったら、若く見られるのは女性として喜ばしいこと。
ここは素直に喜んでおこうと思います。

それで、問題は嫁ぎ先、なんです。

大貴族ということは、お相手はもちろんそれに見合った家柄ということ。

聞いてみたら、なんとこの国の王族でした。

はい、もちろん現国王様ではございません。

国王は御年５７、もちろん妻である王妃様もご健在です。王様は王妃様一筋なので、愛人や側室を作られたり…なんてことは致しません。

ではなくて。

お相手はその国王様の３番目の息子、アレク王子様です。

王子様と結婚…生まれも育ちもここに来るまでは平民だった私が。まるでシンデレラ…いいえ、彼女も実は裕福な家の生まれなので、ちょっと違いますが。

とにかく、相手が王子様というのも十分驚愕の事実ですが、実は問題はそこでもありません。

実は王子様、現在１４歳。

ええ、１４歳です。

そして私の本当の年は、２１歳。

つまり、２１歳の私が、あろうことか１４歳の王子様に嫁ぐことに

なったのです。

０１　嫁入りする前に、ある重大なことに気が付きました。（前書き）

すみません、少し変更しました！！

０１　嫁入りする前に、ある重大なことに気が付きました。

この世界での両親から、衝撃の事実を告げられてから一週間。
私は今、お城へと向かう馬車の中にいた。
えーと…、もう一回言っておこう。
結婚の話を告げられてから１週間。
なのに、既に私は今日から、王子様のお嫁さんとして、お城に入ります。

…なんか、早くない？
だって普通は、こう、準備とか、色々あるものでしょ？
嫁入り道具のセットの準備とか、心の準備とかその他もろもろ。
それともこの期間の短さは、この世界では普通なの？
と聞くと、いや、早いと真顔で母様に言われた。
いいんですけどね、どうせ何週間経ったところで、腹はくくれないだろうし。
それに私の嫁入りセットは、おいおい家から送られてくるそうだし。
そんな訳で、実質この身一つで王子様の元へ向かっているんだけど。
私、ある重大な事に気が付きました。

なんで今！？って自分でツッコミ入れてしまうほど、初歩的な事実。けれど、それを聞かぬまま王子にお会いできない。

「あの、リースン、つかぬことを伺いますが」

すると、私の前に座っている、銀髪ツインテール美少女が「何でしょうか」と言った。

彼女は私についている侍女で、結婚しても一生お仕えします、ということなので、こうして彼女を連れて行くことになった。

性格はすごく面倒見が良くて、口ではなんだかんだ言いながらも優しい少女。

だけどさすがの彼女も、私のこの質問には呆れるんじゃないか…。

心に不安がよぎる。でも…って、ああもう、考えてる場合じゃないぞ、私！

私は勇気を振り絞ると、リースンにとある質問をした。

「私の嫁ぐ、第3王子アレク様って……誰ですか？」

その時確かに、時は止まりました。

リースンが驚愕のあまり、大きな目を更に大きく見開いて。

口は心なしか半開きで、まるで息がとまったかのよう。

うわぁ、美人はどんな顔でも美人だなぁなんて見惚れていると、はっと我に返ったのか。

きっと厳しい顔になると、私を険しい目で睨んだ。

「エリ様。今日は一体どういう日かご存知ですか？」

美人の怒りの迫力に。私はびくりと体をすくませた。

「う、はい。王子様との結婚式の日です」

私が身に纏っているのは、繊細な刺繍が施された白のドレス。

いわゆるウェディングドレスだ。

首元には、何カラットあるんだろう…って思うほどの大きなダイヤが付いた首飾り。

肩まであった髪の毛は結われ、頭の上にはキラキラひかるティアラ。

どこからどう見ても、花嫁さんスタイル。

「では、今はどういう状況かお分かりになりますか？」

「…今は、お城へと向かう真っ最中です」

するとリースンが、はぁぁぁぁ、っと、ものすごく呆れたように長いため息をついた。

「それで、アレク王子をご存じないとは、どういう意味なのですの？」

「えっと、だってこの国には、第1王子と第2王子、それに第1王女様しかいないはずですよね？なのに第3王子って、一体誰のことなんだろう…って思いまして……」

１４歳って、元の世界でいえば、中学生じゃない！？反抗期真っ盛りの、学ラン着ているような。
どうしよう、そんな人と結婚するなんて、しかも7歳も年下だし、犯罪だよね！？
間違いなくショタコンだよね！？

…って、1週間混乱しまくっていたおかげで気付かなかったのだ。

第3王子様っていう存在を、私が知らないことに。

０１　嫁入りする前に、ある重大なことに気が付きました。（後書き）

今日は結婚式当日。
エリさんは、花嫁衣装です。

02　王子のことを、教えて下さい。

「……」

む、無言の沈黙が怖い。突き刺さる視線が痛い。

ちらりとリースンの方を見ると、彼女は眉をひそめながら頭を抱えていました。

その顔にはありありと、

（どうしてくれようかこの人は）

って、書いてあった。くっきりと。

これはきっと、結婚が決まったっていうその時に聞いておくべきことで、お嫁に行く当日に尋ねることじゃない。

ほんとうに、この1週間錯乱しすぎだよ、私。

やがて、ややあってリースンが口を開いた。

「そう、でしたわね…。考えてみれば、エリ様がこちらにいらしたのは2年前。でしたらアレク様のことをご存じではなくても仕方ありませんわ」

ちなみにリースンは、私が異世界からやってきた、って知ってる数少ない人間の一人。

この世界でそのことを知っているのは、リースンと、それから母様

と父様だけ。

「ですが、そういうことはもう少し早くお気づきになるべきですわ」

「はい、すみません…。１４歳っていう衝撃の年齢に思いのほか意識がいってしまいまして」

私はぺこりと素直に頭を下げる。

全くもって彼女の言う通りだから。

でもさすがに情報皆無状態でお会いするのはどうかと…。

かといって今更ながらなこんなこと、リースン以外に聞けないし…。

って顔をしてたら、勿論リースンはきちんと教えてくれました。

ため息まじりに、だったけど。

「この国には、エリ様がご存じの通り、お2人の王子とお1人の王女様がいらっしゃいます。ですが実はその下にもう1人王子がいるのです。それが第3王子アレク様…エリ様の嫁がれる方ですわ」

「でも、私、知らなかったんですよね。それにそんな話も聞いたことがなかったですし」

他の王族の方はもちろん、知っていたんだけど。

だから王族に嫁ぐって聞いた時、てっきりそのどちらかの王子様だと思ってた。

でも考えてみたら2人とも、もう２０は超えてるし。

しかも3番目の王子…って、え、誰それ？みたいな結論に至ったの

がついさっきだったという、なんとも残念な私の頭。

「アレク様はエリ様がこの世界に来られた2年前に、他国へ留学なさいましたの。それからこの国には一度も帰られておりませんわ。ですからエリ様がご存じないのも無理はありません」

なるほど、つまり私と入れ違いにここから出て行ったのね。

道理で知らないはずだよ。

それにしても、2年前…っていうことは、12歳かあ。その歳で、他の国に留学だなんて、たいしたものだよ、うん。

私が12歳の頃なんて…小学生でしょう？お兄ちゃんに夏休みの宿題を全部押しつけてたような、ダメダメ生徒の模範のような子供だったよ。

あの時は、まるまる一カ月分の日記を丸投げしてごめんね、お兄ちゃん。

それにしても、この国の王族はみんなそうなのかな？そんな、そんな年齢から留学とか。

そう聞くと、彼女は首を横に振った。

「そんなことはありませんわ。現に留学されたのは、アレク様だけですもの」

聞けばアレク王子、幼い頃から『神童』と呼ばれる程の切れ者で、その実力は王様をはじめとした城の者全員が認めるほど。

もっと彼の才能を伸ばすため、そして更なる知識を増やし、見聞を広めることは、将来国を背負って立つ国王としては必要な事だろう。

ということで、満場一致で１２歳という年齢ながら他国へやったそうな。

「……って、ちょっと待って下さい」

今、あっさりと聞き流せない単語を耳にしたような。

知識習得のため、見聞を広めるため。それは分かった。

けれどその後。

≪将来国を背負って立つ、『国王』≫

だって、第３王子でしょう？３番目でしょう？後を継ぐのは、こういう時、普通は長男である第１王子なんじゃないの？？？

「いいえ、この国の王位第１継承権は、アレク様ですわよ？」

聞き間違いであってほしい。そんな私の願いをあっさりと砕くように、リースンはきっぱり言い切った。

私が、なぜ、なんて聞く間もなく、リースンは理由を口にする。

「だって神童ですのよ？それに、その歳で、既に国政の一部を担っ

ていたのです。次期国王として、これほど相応しい方はいらっしゃいませんわ」

え———と、……つまり、私の旦那様は未来の王様で、私はそんな方の妻。

それって、私が次期王妃っていうこと、なんでしょうか…？

私の顔に浮かんだ疑問を読み取ったのか、リースンはこくりと頷くと、

「その通りですわ」

そう答えた。

……どうやら私は、年齢差に気を取られ過ぎていて、とても大変な立ち位置に立たされていることを、今更ながら認識致しました。

０２　王子のことを、教えて下さい。（後書き）

肝心の王子様が出てくるのは…もう少しだけ、先です。

０３　ここまできたんですから、覚悟を決めましょう私。（前書き）

私の小説を閲覧していただき、ありがとうございます！！
お気に入りも１００件を超えたみたいで、嬉しいの一言です！！
本当にありがとうございます！！！
（０１を少し変更しました…）

０３　ここまできたんですから、覚悟を決めましょう私。

国王とは、国のトップに君臨するお方。
その妻は、王妃と呼ばれる。
…１４歳の次期国王と、別の世界からやってきた２１歳の未来の王妃。

現国王様は、若くはないし、失礼な話だけどご病気で…なんて今すぐなってもおかしくない。

そうなったらすぐにでもアレク王子が国王になる訳で。

いくら神童、なんて言われてたって、まだ１４歳の少年でしょう？
しかも、それを側で支える妻が、この世界のことを、まだあまり理解できてない私。

私の頭に浮かんできたことは、１つ。

大丈夫なのかな、この国。

だけど、私はそんな未来のことを心配している場合ではなかったのです。

がたんがたん、と、道を走る馬車の車輪、そして馬の蹄の音しか聞こえなかった中に。

ざわざわと。
人の声がし出した。

それも、お城へ近づくにつれ、その音が大きくなっている。

「？なにか、人がたくさん集まっている気配がしますね」

「当たり前ですわ。だって未来の国王の結婚式ですのよ？これは国家の１大イベントですもの。国中から一目見ようと、国民が集まっていますわ」

１大イベント。確かに。

日本でいえば、皇太子の結婚式、みたいなものだよね。

後はイギリスとか他の国でも大々的にやってたっけ。テレビでも、生放送、とかで。

やばい、今自分がその中心にいるかと思うと、途端にドキドキしてきた…！！

だって、私、容姿も普通の平々凡々人間だし、そんな、注目される人生送ってきていないですから！

そんな私の緊張をよそに、ざわめきが大きくなるなか、馬車は静かに止まった。

馬車の扉がゆっくりと開く。

まず目に飛び込んだのは…。

どこまでも続く、真っ赤な長い絨毯。

そして。

割れんばかり、大音量のラッパのファンファーレ。

「未来の王妃、エリ様がご到着されました！！」

そして高らかに宣言される男性の声に合わせて、カーペットの両側に立つ兵士たちが一斉に敬礼をした。ここでひと際大きくなる大歓声。

「うっ…」

き、消えて、しまいたい。なんなの、この大層なお出迎えは。

大袈裟すぎやありませんか！？

私に、あのレッドカーペットを渡れと？周りが大注目の中？

こんなの、生で見るの初めてだよ。ハリウッドスターがキラキラ笑顔を振りまきながら通る、そんなやつだよね？

「リースン、私無理」

「何を今更」

「だって、私今日１０センチヒールですし！！こけますって！！あんなに人が見てる中それをすると思うと、恥ずかしいじゃないですか！？」

しかもドレスの裾は、恐ろしく長い。私の身長分はありそう。

私の夢は、外国の小さな教会で、慎ましやかな結婚式をあげることだったのに。

まあ外国っていうのは、あながち間違ってはいませんが。スケール

が大きすぎる。
全然慎ましやかじゃない。むしろ真逆をいっているこの感じ。
私が必死の形相で訴えてみたけれど、侍女は満面の笑みを浮かべてスルー。
手早い手つきでベールを私の頭にかぶせると、
「エリ様。さあ、覚悟を決めて、行きますわよ！」
「きゃぁ」
勢いよく後ろを押されて、私の体は外に投げ出された。
うわぁ、こける！！しかも顔面から…！？って思っていたら、誰かが私をナイスキャッチ。
「怪我はない？可愛いマドモアゼル」
さらりとそんな台詞を、甘やかな声で言ったのは、第1王子のハーベイ様。
灰色の相貌で私を見つめると、その端正な顔立ちに蕩けるような微笑みを浮かべた。
あぁ、眩しくて溶けてしまいそう…。
そんなことを考えていると、王子は私の左手を自分の右手と重ねる。
「！？」
え、なんですか、この状況。なぜに第1王子様が私の手を？

なんて思いながらぽかんと王子の顔を見ていると、不意に反対の手を誰かに掬われた。

「え」

今度は何事なの、と思ってそちらを見れば、短く刈り込んだアッシュの髪と瞳を持つ第2王子、マエスト王子が無言で立っていた。

ハーベイ王子と同様、こちらも目元涼やかな、やはり美形。

「エリ様、行こう、アレクがお待ちかねだよ」

私よりも1オクターブ高い声に振り返れば、流れるような亜麻色の髪をウェーブさせた美少女、第1王女マリア様の姿が。

そしてこちらも超が付く程の美少女。

…この世界に来てから思ってたんですが、何気に美形率が高いです。

その中でも王家の血筋は格別で。

王様はもとより、王妃様は若い頃は国一番と謳われる程の美人さんだったそう。

そんな訳で、その血を色濃く受け継いだ王子王女様方は、私のような者が直視するのは畏れ多いほどの美貌の持ち主。

そんな王子2人に両手を取られ、ドレスの裾を王女様とこれまた麗しの侍女リースンに持たれ。

更にもう一度後ろを振り返れば、ひしめくほどの、大勢の観衆の皆様の姿が。

分かります、ええ、感じますとも！！
皆が私に注目しているのが嫌と言う程！

…ええい、もう、こうなったら行くしかないじゃないですか！！

両隣りに人が付いているんだから、転びそうになっても助けてくれるだろうし。

私は、２人の王子にエスコートされ、王女と侍女に裾持ちをされ、大勢の観衆に見守られながら足を一歩、踏み出しました。

０３　ここまできたんですから、覚悟を決めましょう私。（後書き）

いよいよ結婚式が始まります。

０４　永遠の愛を、誓ってしまいました…。（前書き）

読んでいただいている皆様、誠にありがとうございます。
ようやく、肝心の王子様がちょびっと、出せました…！

０４　永遠の愛を、誓ってしまいました…。

長い長いそのカーペットの先は、お城の大広間につながっていて。
そこには今までいた兵士とお城の侍女たちの代わりに、今度は貴族の皆様がずらりと勢ぞろい。
顔を見たことないような方から、前に視線を向けるにつれ、私でも名前を知っている大貴族の方々が見えました。
さっきまでの喧騒が嘘のように、中はしんと静まり返っていて。
ため息一つこぼせない程の静寂。

その時。

私が入口に立ったのと同時に、元いた世界でもお馴染みのあの音楽が、大音量で鳴り響いた。
タタタターン、タタタターン、から始まる、結婚行進曲。
しかも、広間の隅の方で控えていたらしい、オーケストラの生演奏。
世界は違っても結婚式での入場の音楽は一緒だなんて、なんだか不思議な気がする。
ふっと気付くと、両隣りにいた王子の姿はなくて、代わりに立っていたのは私の父様。
父様は私をじっと見ると、ふわりと優しく微笑んだ。
言葉はなかった。けれどその瞳は言っていた。

（大丈夫、何も心配することはない）

そんなに私、不安そうな顔してたかな？？？

…うん、してたかも。だって顔も初めて見る相手、しかもその存在をきちんと認識したのもついさっきっていう状態で。

その上相手は7歳年下の次期国王様。

動揺しない方がおかしいと思う。

けれど、その顔を見て私の心は少し軽くなったみたい。

ありがとうございます、父様。私もそんな気持ちを込めて微笑み返した。

礼服、のようなものに身を包んだ父様と私は、その後仲良く腕を組んで参列者たちの間を通り抜ける。

…そういえば、お兄ちゃん言ってたなぁ。

俺が父親の代わりに、ウェディングドレスを着たお前と一緒に花道を歩くんだからな！！って。

だけど、ごめんなさい。

それはもう無理みたいです。この世界にはいない兄に、心の中でそっと謝った。

そして。

広間の終着点に立っている、一人の人間。

白いタキシードを着た、金色の髪の毛をした人の姿が、そこにはありました。

「……っ！！」

ベールで視界がぼやけて顔ははっきり見えないけれど。

絶対、絶対あの人だよね、アレク王子って。

だって白い服着てるし！祭壇の前で立って私を待つ人なんて、新郎しかいないよね！？

顔が見えそうになった瞬間、私は思わずベールの下で顔をうつむかせる。

１４歳、この人が、１４歳の王子様…。

見たいような見たくないような、そんな複雑な心境で。

どうせこれから先嫌と言うほど顔を合わせるだろうのに、私はささやかな抵抗を試みる。

さっき不安を軽くしてもらったばかりだけど、やっぱり実際目の前にするとそうもいかないみたい。

心がざわめく私をよそに、ついに父様から王子の手に私がバトンタッチされた。

その手が驚くほど冷たくて。一瞬体をびくりとさせる。

私は王子に手を握られ、目の前の階段を一歩、また一歩と昇る。
なんだか死刑台に向かう気分…とまでは絶望的なものではないんだけれど。
他の花嫁さんたちと同じ、幸せな気持ち、には程遠いのは確か。
階段の先には祭壇があって、牧師さん…よろしく、国王様が神妙な面持ちで立っていました。
ゆっくりとフェードアウトしていく音楽。
それと共に再びあの静寂が戻ってきた。
張り詰めた空気に、私は再び緊張していくのを感じる。
やがて、王様が厳かな声で言葉を発した。
「アレク・ガイナ・ブリストル、汝、病める時も健やかなる時も、共に歩み、死が二人を分かつまで、愛を誓い、妻を想い、妻のみに添うことを、エルミニ王国国王の名のもとに、誓うか？」
「はい、誓います」
隣から発せられた声は、まだ少年の名残を残した、少し甲高い声。
声を聞いて思う。やっぱり彼は、王子はまだ１４歳だって、改めて実感させられる。
次は私の番、です。
「エリ・サイレン・シルバーナ、汝、病める時も健やかなる時も、

共に歩み、死が二人を分かつまで、愛を誓い、夫を想い、夫のみに添うことを、エルミニ王国国王の名のもとに、誓うか？」

…ここで、誓いません、なんて言ったらどうなるんだろうって考えるけど、勿論言いませんよ？

空気はきちんと読めますから。

「はい、誓います」

声が少し裏返ってしまったのは、大目に見てください。

それから次は、指輪の交換。

なぜかサイズがぴったりの銀の指輪。

いつ、どのタイミングで測ったんだろう。あつらえたみたいに、しっくりと指になじむ。

それにしても、王子様、女の私が憎らしくなるくらい、細くて綺麗な指をしてる。色白だし。

私と同じぐらいのサイズなんじゃないんだろうか、これ…。

いくら年下とはいっても、これはかなりへこむかも…。

そんな複雑な思いの中交換タイムも終了し。

最後に。

やっぱりと言うべきか結婚式と言えばおなじみの、あれが最後に待ち受けていました。

「それでは、２人、誓いのキスを」

０４　永遠の愛を、誓ってしまいました…。（後書き）

結婚式…出たことがないので、こんな感じかな、と思いながら書きました。
難しいですね…。

05　まさかまさか、まさかです！

キス。

もちろん21年生きてきて、これがまさかのファーストではありません。

ええ、ありませんとも。

ちなみに私の初めては、隣の家のダンじいちゃんだという話。

でもじいちゃんとのそれなんて私が赤ちゃんの時だっていうんだから、まったく覚えていない。

ということは、実質これが私の初めての…ってことになります。

恋人いない歴＝彼氏いない歴っていう可哀そうな私なんだから、仕方ないこと。

……だって、正直日々を生きて行くのに精いっぱいで、恋とか愛とかしている暇なかったし。

その貴重な二度目が、まさか今だなんて！！

向かい合った私のベールが、そっとはがされる。

…つまり、ここで初めて件の王子様と初対面となるのですよ。

いつまでも顔を床に向けている訳にもいかない。

私は意を決して前を見据えました。

「……」

予想はしてました。

あれだけ美男美女勢ぞろいの家系なんだから、アレク王子もその例から洩れないと。

実際初めて見た王子は、金髪碧眼、容姿端麗、その上どこからやってくるのか、キラキラ光る光の粒子をまき散らした笑顔は、破壊力抜群。

ただ。

か、か、可愛すぎる…！

おとぎ話に出てくるような、理想的な白馬の王子様…に、あと何年か経てばなりそうだけど、今のところはその予備軍。

天使のような外見の美少年。はい、少年です。

１４歳だ、もう驚くほど、その年齢通りのお姿で。

身長も、私とあんまり変わらない。

これが、例えば第２王子のマエスト様みたいに、年齢より老け…じゃなかった、大人っぽく見えるタイプだったらまだ、私の中でも色々ふっきれたかもしれないけれど。

駄目、私の精神は、そこまで強くありません。

そんなことを考えているうちに、王子の顔が近づいてくる。
ゆっくりと、私の唇を目指して。

そして。

目を閉じるっていう暗黙のルールすら忘れていた私は、アレク王子を凝視したまま、口付けをされていました。

……その後は、あんまり覚えていなくて。

ただ、真っ白になって完全にショートした頭で、それでも笑顔を作って、お城の下にいた大勢の人たちにお披露目をし、馬車で王子と共に街にある中央広場をぐるりと一周して。
それはなんとなく記憶にあります。

けれどひどく体力気力共に消耗していて、あてがわれた部屋に戻ってから私は、そのままベッドに倒れこんで。

そこから記憶がぷっつり途切れました。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

小鳥の鳴く声。

甲高いさえずりが聞こえて、私はふと、目を覚ましました。

「う…」

まず飛び込んで来たのは眩しい日の光。

「あ、さ？」

あれ、昨日私どうしたんだっけ…？

私は寝起きの頭を必死に回転させて、記憶を掘り起こす。

確か式が終わった後、色々キャパがオーバーして、それに疲れてたのもあって、ドレスを脱いでそのままベッドに直行だった気がする。

そして一回も目を覚ますことなく、熟睡。

で、今に至る。

「ん……」

隣で寝ていた人が、軽く身じろぎをする。

「……え？？？」

ちょっと待って、私の隣で、寝ている、人？

太陽の光でキラキラ光る金の髪を持つその少年は、とても見覚えのある人物で。

「え、何なんですか、この状況」

待って、待って、待って！！

私はがばっと毛布をめくる。

私は、なんかベビードールみたいなひらひらフリルのついた服を着ていて。

これは部屋にあったもので、他に着るものもなかったし、とにかく早く休みたかったからってあまり深く考えずに着た。

こうして明るいところでみると、恥ずかしいですが。

なんか、透けてますし。

そして少年の方はというと……なぜか一糸纏わぬ生まれたままのお姿…。

「うわぁぁぁっ！！！！」

私は思わず毛布をかけなおす。

え、何、これって、あれ？？？あれなの？？？

私、中学生のような男の子相手にアレなの？？？

アレしたの！？！？

だって、昨日はそのまま寝て、私一回も起きなかったよね！？

寝るときは、確かに一人だったよ、ね？？？

ひとりあたふたしていると、目を覚ましたのか、少年がゆっくりと目を開いた。

ふわふわの髪にひょっこり寝癖を付けた可愛らしい彼は、私を見て微笑む。

「エリさん、おはよう」

それから、彼はそのあどけない顔を少し赤らめながら視線を逸らした。

え、この感じ、何ですか？

彼、なぜかもじもじしてますし。

もしかして、私、少女マンガとかドラマでおなじみの、あのベタベタなシーンですか！？

ほら、よくあるじゃない、鳥の声で目が覚めて、恋人たちが2人、ベッドの上で目を覚ます、的な。

2人とも、あられもない姿で、的な。

的な。

もしかしてそんなお約束な展開ですか！？

未成年相手に？

しかもこの反応、私からごにゃごにゃな感じで！？

その瞬間、私の口から言葉にならない大絶叫が、お城中に響き渡りました。

05　まさかまさか、まさかです！（後書き）

なんてベタな展開（笑）
それにしても長かったです。
ようやく王子様の顔が出せました。
これからエリさんとたくさん絡ませてあげたいです☆

０５．５　アレクの独白（前書き）

アレク王子の心中です。

０５．５　アレクの独白

今日という日を、僕は心待ちにしてたんだ。

２年前のあの日、あの人と出会った時、僕は柄にもなく、運命の女神様っているのかなって思った。

今までモノクロだったのに、急に色が付いたみたいに鮮やかに世界が見えて。

あの人のことを考えただけで、胸が苦しくなって。

これが、この感情が、世間でいう『恋』だって気が付くのに、時間はかからなかった。

おかしいよね。

そんな感情、今までくだらないって考えてた僕なのに。

気付いたら、僕はすぐに動き出していた。

彼女のことを調べて、国王を説得して、彼女との結婚を約束させて。

あの人と結婚できる！

そう思ったらいてもたってもいられなくて、本当は４年だった留学期間を、２年で成果を出してここに戻ってきた。

ようやくあの人と会える、って喜んでいたのに、彼女は式の最中もずっと上の空。

しかも、記念すべき初めての日に、エリさんは僕を残して一人夢の中。

こんなのって、許せないよね？

だから僕は、夜中にこっそり忍び込んで、寝顔を見て。

その時ちょっとしたいたずらを思いついたんだ。

もし、一緒のベッドにもぐって、それに気づいたらエリさん、どんな顔するかな。

それが見たくて、僕はそっと体を忍び込ませた。

それから朝になって。

僕の方は浅い眠りだったから、エリさんが起きたのもすぐに分かった。

だけど彼女がしばらく動揺しているのが気配で感じられたから、そのまま寝たふりをしていた。

それからタイミングを見計らって、僕は目を覚ます。

予想通り。

何があったか分からないって顔。

だから、僕は顔を赤らめて、ちょっとはにかんだ顔をしてみせた。

そしたらエリさん、そういう感じで勘違いをしてくれた。

だけど悲しいかな。

僕の見たかったものと、それは少し違ってて。

あの人の顔に浮かんでいたのは、恥ずかしさ、とかそういうものじゃなくて。

自分に対しての罪悪感と、僕に対しての罪悪感。

年下の僕に手を出してしまったらしいことに対しての。

その瞬間、僕は悟った。

この人は、僕をそういう対象として見てくれてないって。

年の差なんて関係ない。僕はそれでもエリさんがいいって思ったんだから。

だけど彼女はそうじゃないみたいだ。

そのことをはっきり感じられて、少し悲しい気持ちになったけど。

今はそれでも構わない。

一緒にいられるのなら、それでいい。

それだけで、僕は幸せだって思えるんだから……。

06　誠心誠意、謝罪しましょう。

「うわぁぁ、私、最悪……」

この世から消えてしまいたい。最低、まさかあんな可愛らしい王子様に手を出すなんて…！！

元いた世界だったら、完全に犯罪者ですよね、私。

一応好みは年上男性のはずなのに。

そういうショタコンの気はなかったはずなのに！

しかもあの後勇気を出して色々聞くと、どうやら私は「激しかった」らしく。

…その上、シーツの上には血痕が。

なかったことにしてしまいたい。

そうしてしまいたい。

いや、その、世間一般的に、昨日は結婚した二人の初夜、ということで、そういうアレが行われるのはむしろ当たり前なのかもしれないけど。

何度もいうように、相手は年端もいかない7歳年下の少年ですよ！

そんなあどけない彼にあんな顔をさせるなんて、私は大人として失格です！

しかも覚えていないとか…。

ああもう無理、立ち直れない…。

王子が何も言わずに出て行ったあと、私が部屋の隅っこでうずくまっていると、扉がドンドンとノックされる音が。

声を出す気になれず、無言でいると、問答無用で開けられた。

…ならノックする必要はあったのかな。

そしてそんな無遠慮な事をするのは、私の知る限り一人しかいない訳で。

見覚えのある銀色の頭がひょっこり見えました。

「エリ様、もうお昼ですわよ！起きていらっしゃるのなら返事ぐらいなさって下さいな」

「リースン」

トゲトゲしい声でそう言った彼女だったけど、私の憔悴した様子を見ると顔色を変えた。

「い、一体どうされたんですの？そんな部屋の端で小さくなられて。もしかして、具合が悪いんですの！？」

彼女が心配そうに近づいてくる。その姿を目にした瞬間、私は…。

「う――――、リースン、どうしよう！！私、極悪人になってしまいましたぁ！！」

私はすがるようにリースンに泣きついて、さっき起こった出来立てほやほやの事件について語ったんだけど。

結論。

彼女は取り合ってくれませんでした。

そんなの、夫婦になったんだから当たり前、だの、王子ももう１４歳で子供も作れる年齢だから気にすることはない、なんて軽くあしらわれたんですが。

いやいやいやいや、確かに正論ですよ？至極ごもっともな意見ですが。

こう、ね？心がもやもやするというか、元の世界でいったら、学ラン着ている男の子に悪戯するもんですよ？

日本なら絶対、なんちゃら罪とかで捕まるって。

それからずっと、頭をひねりながらどうすればいいか考えたけれど。

だめだ、何も思いつかない。

ただひとつ思いだしたことがあって。

…そういえば私、きちんと王子に謝ったっけ？？？

自分がしでかした罪の大きさで頭がいっぱいで、きちんと謝罪をしていなかったことに今更ながら思い当たる。

ならば、私が今すぐにすべきことは。

私は出された朝ごはん兼昼ごはんもそこそこに済ませると、アレク王子に会うべく慌てて部屋を飛び出しました。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

王子の居場所を聞くと、今はちょうど自室に戻っている、ということだったので、そちらへ足を向ける。

部屋の外でリースンを待機させて、私は一人中に入る。

そして体を中に滑り込ませると、私はまず頭を下げて開口一番謝罪の言葉を口にした。

「謝って済む問題ではないことは、十分承知の上です。許してほしいだなんて言いません。ただ、どうしてもきちんとお詫びしないと、と思いまして」

「……っく」

王子の声がかすかに震えている。

まさか昨日のことを思い出して泣いているんじゃ…！？

不安になった私は、頭をあげて……って、あれ？

なんか、思ってたのと違う。

王子は下を向いて、肩を震わせて…そこから声が漏れていて。

その声は徐々に大きくなって。

そしてどう考えても、それは泣き声ではなく。

「はっはっは、ふ、ふふふ、あ、ああ、ちょっと待って！！あっはっはっは」

こらえきれずに大声になった王子は。

……目に涙をためながら笑っておいでした。

「あ、あの」

あれ、今笑いどころってあったっけ？？？

私がぽかんとしていると、王子は眼のふちにたまった涙を拭きながら言った。

「まさか、今朝のあれ、本気にした？」

未だ声をひきつらせながら、王子がそう尋ねる。

私の頭にひたすら浮かびまくるクエスチョンマーク達。

本気も何も、あれだけ状況証拠が揃っている状態で…。

目を点にしていると、アレク様が驚くべき発言をした。

「あれね、全部嘘だから」
「嘘！？」
なんですと！？
「え、でも、アレク様、服着ていなかったですし」
「うん、わざと」
悪びれもなくそう言う。
「だって、顔を赤らめたり視線を逸らしたり」
「あれは演技」
何それ！？
「それに、激しかったって」
「エリさんの寝相がね」
確かに私の寝相は悪い。キングサイズのベッドから転げ落ちることもしばしば。
でも。
「じゃ、じゃああの血は」
「あれは寝返りを打ったエリさんの爪が、僕の腕を引っ掻いたから」
そう言って見せられた腕には、なるほど、確かに誰かに引っかかれたような痕がある。
「それでは、つまり」

すると、アレク様は天使のような無邪気な微笑みを浮かべながら、さらりと仰いました。

「もちろん、エリさんが勘違いするように僕がわざと仕向けたことだよ」

07　可愛さとは、罪深いものです。

現在の状況。

今朝起こったあれ、実は王子様の狂言だったことが分かりました。

「ちょっと待って下さい！！」

私は思わず王子に詰め寄る。

「なんでそんなことをするんですか！？」

私は大変なことをしでかしてしまった！！！と思って色々悩みまくっていたのに！！

これは一体どういうことですか！？

大人をからかうもんじゃありませんよ！？

だけど王子は怒り狂う私をみても、なんら反省の色もありません。

それどころか悪びれる様子もなく、しれっとした様子で言いました。

「え、ただびっくりさせようと思って」

ええ、ええ、確かに目ん玉ひっくり返るくらい驚きましたよ。

道理で記憶がないはずだ。だって本当に何もなかったんだから。

とりあえず、自分が犯罪者にならなくてよかったとそこは一安心だけど、これは7歳も年上の私としては、きっちりと叱らないと。

「アレク様、やっていい冗談と悪い冗談がございます。アレク様がしたことは、間違いなく悪い方です」

すると、王子は私が怒っている様子を確認すると、急に顔を曇らせた。

「…ごめんね、もしかして、怒った？」

青の瞳をうるうるさせ、こくりと横に首をかしげる仕草。

しかも、今王子は椅子に座って私を見上げている状態な訳で。

「うっ…！？」

い、いかんよ、私、流されたら。

いくら王子がとてつもなく愛らしい美少年だとしても、これは許せる問題じゃなんだから。

悪いことは悪いって叱る大人がいないと！！

自分にそう言い聞かせ、必死に抵抗してみるも……。

「そうだよね、本当は昨日、エリさんに会えるの楽しみにしてたのに、あんまり話せなくて。それで式が終わったらいっぱい話そうと思ってたのに肝心のエリさんは寝てたから。なんだか僕、悲しくなっちゃって。だから、ちょっと困らせてやろうって思ったんだけど…。ほんとうにごめんなさい」

大きな瞳が少し赤くなり、今にも泣き出しそうなこの表情。

なんだか私が、かよわい子供をいじめたような気分に…。

あーうー、頭の上に、ワンちゃんのしゅんと垂れ下がった耳が見えるよ。

そんな顔されたら、そんなポーズされたら…。

「……まあ、次からは気を付けてください」

はい、降参です。

白旗を振りました。

無理でした。

これがその辺の生意気盛りの子供だったら絶対に許さないけど、相手が悪かった。

絶対に分かっててやってるだろう、そのポーズ！

って思っていても、その愛らしい魅力に負けてしまう弱い私…。

ああ、可愛いってホント罪。

それに、確かに王子のやったことはかなり悪質なものだけど、私がそもそも悪いんだし。

うん、そう。王子だけを責められることじゃない。

そう結論付けることにした。

それにしても。

さっきは謝ることしか頭になかったから気付かなかったんだけど。
私はあらためて部屋の中を見渡す。
もちろん嫁いできた私の部屋よりは広い。なんせ次期国王様ですから。
なんだけど。
私が目を見張っているのは部屋の広さでも、華美な装飾品の数々でもなく。
部屋いっぱいに広がる、書類や本の山。
王子の目の前には大量の紙が広げられており、莫大な数の本が入りそうなほどの大きな棚から、それでも足りないのか、入りきらない分が床に積み重なっていて。
ソファやキャビネットの上もそれは同様。
果てはベッドの上にも束がある。
ここに来て2年、文字は日本語とは違っていたけど、勉強したのでそれなりに読み書きはできるようにはなった。今じゃ一般の書物ぐらいは読めるんだけど、目の前の机の上にある書類の文字は、一見しただけでも難しそうな単語がちらほら。
「アレク様、これらは一体…」
私が部屋中に散りばめられたそれらを見ながら尋ねると、王子はバ

ツのわるいような笑いを浮かべた。
「ごめんね、僕の部屋、散らかってるよね」
「いえ、そういうことではなくて」
一体何なんですか、と尋ねようと口を開く前に、後ろの扉が乱暴に開け放たれた。
「アレク、悪い、ちょっといいかな？」
髪を振り乱し入ってこられたのは、ハーベイ王子。
昨日のきらびやかな衣装とはうって変わって地味な装いだけど、これもまた素敵。
イケメンさんは何を着ても似合うらしい。羨ましい限りだ。
王子は小走りで部屋に入ってくると、手元の紙を見ながらアレク様に声をかけた。
「実はここの部分で聞きたいことがあって……あ、君は…、エリちゃん？」
そこで私の存在に気付いたのか、彼はしかめっ面だった形相に笑顔を浮かべ。
それからアレク王子と私を見比べると、困ったように頭をかきむしりました。
「え…っと、今はお取り込み中、かな？出直した方が」
「いえ、いいえ、私の用事はもう済みましたから！！」

どう見ても、ハーベイ様の方がお取り込みのよう。
私の目的は、まあ達成されたんだし、ここはハーベイ様に譲らないと。
私は軽く頭を下げると、退室の体勢をとる。
部屋を出る前にちらりと見えた2人の王子は、なんだかとても真剣な顔つきで書類とにらめっこしてた。
外に待機させていたリースンに声をかけ、私達は自室へと向かって歩き出す。
「それで、謝罪はうまくいきましたの？」
「あー、うん、そうですね、うまくいったというかなんというか」
そもそも私が謝るようなことはなく、単なる勘違い、だったんだけど。
それも、アレク様本人が仕込んだっていう。
「まあそのことは終わったことなので」
「なんですの、何か怪しいですわね。はっきり仰って下さいな」
「えーと、実はあれはアレク様の狂言だったっていうか」
「狂言…嘘だったんですの？あのことが？」
「そう、それで…」
2人でそんな会話をしながら廊下を歩いていると、後ろの方から誰かの呼ぶ声が聞こえてきた。

「？」

私の名前だった気がして振り返ると、そこにはさっきも部屋でお会いした第1王子様のハーベイ様が、手を振っていた。

「エリちゃん！！」

走って来たんだろう、うっすら汗ばんだ様子で王子は私達の元へやってくると、足を止めました。

なんなんだろう、もしかして私に用事？

でも王子と会ったのは、昨日のエスコートの時とさっきの部屋と、まだ2回目で、ろくに話もしていないのに…。

私が訝しげに王子の顔を見上げると、彼はやっぱりお美しい顔に極上のスマイルを浮かべ、予想外の言葉をかけてきました。

「よかった、君に少し話があって。今からちょっと時間、ある？」

０８　お兄様と、３時のお茶です。

時間帯的にもおやつの頃合いだったので、私と王子は中庭でお茶することになりました。

ポカポカ陽気で天気もいいし、風もそんなに強くないから快適！！太陽の光が直接当たらないように、パラソルのようなもの（もっと高級そうな感じですが）をさした下で、私達はリースンの入れてくれた紅茶とお茶菓子をつまんでいました。

「こんないい日は、昼寝とか、いいと思わない？」

キラキラした瞳で、ハーベイ様が私にそう尋ねる。

「はい、そうですね」

私は王子の言葉にそう返しながら…内心すごく戸惑っていました。

急に、今から話をしよう、なんて言われて、２人で中庭でお茶なんかして。

しかも用事がある風だったのに、一向にそれに触れる気配がない。

一体何をお考えなのか。

気になって、せっかくのお茶の味も色とりどりのマカロンの味もよく分からない。

心中を探るように王子の顔をじっと見つめていると、視線に気が付

いたのか不思議そうに私を見返した。

「…どうしたの？そんなに俺の顔を見て」

「いえ、その」

どうしたも何も、あなたが話があるっていうからここに来たんですが。

もちろん、美形な王子様とのお昼のお茶は楽しいですし、かっこいいお兄さんを見るのは目の保養にはなるんだけど。

「……ハーベイ様、そろそろ、私を呼びとめた理由、教えて頂けないでしょうか」

さすがに我慢の限界。

正直、気になって気になって仕方がない。

耐えきれずそう尋ねると、ハーベイ様は不満げに口をとがらせる。

「えー、エリちゃんはアレクのお嫁さんでしょう？ってことはつまり、俺の妹、ね？なのにそんな他人行儀に、ハーベイ様呼びはひどくない？ここは、『お兄ちゃん』って呼ぶべきだと」

「え」

……まあ、確かに世間一般的には、ハーベイ様は私の兄、義理兄です。

そして私の質問は無視ですか。

けど、さすがの私も出会って間もないお方を、しかも王族に「お兄

ちゃん」なんて気易く呼べるほど、肝はすわっていない。
しかし、この人がそれを望むのなら、私は最大限努力しなければ！
「お、お、お兄……様」
ちゃん付けは、まだまだ難易度が高いようです。
せめてお兄様呼びで勘弁して下さい。
だけど、ハーベイ様はこの呼び方でも納得してくれたみたい。
「うん、まあ及第点かな。それじゃあ今度から、俺のことはお兄様、って呼んでね」
そう言って、ぱちりと気障なウィンクを投げてきた。
唯一の肉親リアルお兄ちゃんがそんなことしようものなら、鳥肌立てて全力で気持ち悪い、ってつっこめるけど、こっちのお兄様は似合っておいでなので、何も言わない。
「ごほん。では、…お、兄様に質問があるんですが」
まだ言い慣れていないので、多少つっかえ気味なのは御愛嬌と言うことで流してほしい。
「ああ、うん、今日君を呼んだ訳ね？」
今度はきちんと認識してくれたようで、やっと本題に入れそう。

「うーん、とりあえず、一つ目としては、アレクのお嫁さんっていうことで、どんな人なのか気になったから少し話してみたくなって」

オレンジ色のマカロンを指でつまみながら、お兄様は私を頭の先からつま先まで眺めた。

そして再び私の顔に目線を戻すと、にやにやした笑いを浮かべた。

「なんせ、あのアレクが自分から妻にしたい！！って国王に直々に嘆願しに行ったくらいだからね。兄として、そりゃあもう気になるでしょ」

「え、嘆願、ですか？」

「そう」

何それ、私そんな話、初めて聞いたんですけど。

ちらりと後ろに目線をやると、リースンも同じように目を丸くしていた。

どうやら彼女も知らないことらしい。

「その顔は、どうやらこの結婚が決まったいきさつも知らないようだね」

「はい、実は全く」

そもそもアレク王子様の存在を認識したのも、つい２４時間ほど前ですから。

…と、もちろん馬鹿正直には答えなかったけど。

「どういう風に説明受けてる？今回の結婚に関して」

「そうですね、1週間前に、突然第3王子と結婚が決まったからよろしく！みたいな感じでしたけど」

本当にそんなざっくりとした説明だった。

言われれば、さすがに早っ！？とか急だなとは感じたけど。

だけどお兄様の次の台詞は、私にとって爆弾発言だった。

「実は、今回のそれ、2年前から既に決定事項だったんだよね」

何ともなしに言うので、うっかり聞き逃すところだったんだけど。

2年前…それって、私がこっちに飛ばされてからすぐってこと？？？

そしてそれは王子が留学に行くその前後、ですよね。

？？？？？

頭が混乱する。

だって、私その時にアレク様の存在は、当然知らなかったし、なのにその時に王子が私との結婚を決めていた、だって！？

謎だ、謎すぎる。

私が説明を求めるようにお兄様を見ると、彼はゆっくりと頷く。

そして、その口から色々と衝撃的な事実を語り始めました。

09　アレク様への、謎だけどんどん膨らみます。

アレク・ガイナ・ブリストル。

父はエルミニ王国国王ラレイ、母は国一番の美女と名高いセシル。
その間に生まれた４番目の息子、第３王子。

幼い頃から頭脳明晰で、３つの時からその能力を遺憾なく発揮し、
その為神童と世間では呼ばれていた。

その才能は王族のみならず、貴族たちや国民も認めており、彼が８
つになった頃、国王は将来彼に王位を譲ると宣言した時も、誰も驚
かなかった。

頭がいいだけでなく、人を使うことにも長け、その上王族の血を受
け継いでいるため容姿も極めて美しい。

ただ、彼には一つ欠点があった。

感情が欠けていたのだ。

頭がよすぎるからだろうか、喜怒哀楽、その気持ちが皆無だったた
め、どんな時も無表情で、まるで人形のようだ、と皆からは囁かれ
ていた。

それは国王を含めた家族も心配していたことだった。
王としてはこれほどまでに優秀で適任な者はいないが、果たしてこ
の感情のなさはいかがなものか。

何をするにも冷静沈着で、決して取り乱したりせず、世の中を達観して見ていた王子は、幼いのに子供らしくなく、そのことだけが不安だった。

ほしいものはときかれても、何もないと言う。

好きな物はときかれても、何もないと言う。

生きながら既に死んでいるようにも見受けられた。

そんな王子が１２になった時、留学の話が持ち上がった。

そういうところはあるにせよ、能力的には問題はない。

将来のためにも知識を深めておくことは大切だということになり、海を越えた国へ向かうことが決まった。

勿論、王子に異論はなかった。

その、出発の半年ほど前のことだった。

今まで感情のない人形だった王子に、劇的な変化が見られたのだ。今まで誰も寄せ付けないぴんと張り詰めた空気を纏っていたのが、急に柔らかくなり。

笑ったり、悩んだり、色々な表情をするようにもなり。

それは年相応の言動に見えた。

もちろん神童としての才能はそのままでだ。

急激な変化に周りは驚いたが、それはむしろいいことだろう。
これで世継ぎとして不安はなくなったと安心していた頃だった。
留学に旅立つ前日に、彼は国王にあるお願いをした。
「とある女性と結婚したい」
もちろん、王も初めは渋った。
未来の国王の結婚相手は、政略結婚だ。その時点で相手も決まっていた。
けれど、王子は引き下がらなかった。
それなら国王になることをやめる、と。
そこまで言った。
これにはさすがの国王も焦った。
だからある条件を付けることにした。
「留学期間は４年だ。それよりも早く成果を出せたら認めてもいい」
その言葉を胸に刻み、王子は他国へ旅立った。
そして王子は見事にその言葉通りのことを成し遂げた。
十分すぎるほどの恩恵を自国にもたらした王子に、さすがの国王も首を縦に振るしかなかった。

相手方には、何も伝えていなかった。
どうせ一時の気の迷いだろう。
そう軽く考えていたのだ。
だが現実は違ったのだ。
王子が帰国すると、慌てて国王は相手に王子との結婚を記した手紙を送った。
国王からのそれは勅命だ。断ることは許されない。
そして1週間後。
その娘が、王子の元へ嫁いでくることになった。

「……で、エリちゃん、君がその相手だっていうこと」
お兄様は話し終わると、紅茶をすすってにっこり笑って私の目を覗きこみました。
けれど私は、美貌のお兄様に見つめられていたら普通はドキドキす

るだろうのに、それどころじゃない。

ただ、呆然としていました。

だって、だって！！

「あ、の」

もしその話が本当なら、私はやっぱり王子とどこかで会っていることになるのに。なのに全く記憶にない。あんな美少年、一度会ったら絶対に忘れない自信があるのに！

「ハーベイ様、実は私、アレク様とお会いしたことがないんです。でもその説明だと、アレク王子は私と面識がある風ですよね」

「うん、直接会って、話もしたって言ってたからね」

話…。

一生懸命普段から使わない頭をフル回転させましたが、やはりだめです。かすりもしない。

私の記憶力が本当にだめだめなのか。

それとも……。

私は一つ、気になったことがあった。

王子が留学する半年前。そこで私達は会ったようだったけど、その時の私は、まだ元の世界じゃないんだろうか。

だって、私がここに来たのは、正確には2年と1か月前。そして王子が留学に行かれたのは、今から2年と1か月前。

……このタイムラグはなんなんだろう。

ほら、やっぱり私、こっちに来ていない時だ。

それじゃあ王子の話は嘘なの？？？

もしくは。

人違い、とか？

思ったことをそのまま口に出すと、残念ながらハーベイ様は否定した。

「アレクは、間違いなく君だと言ってるよ。名前もエリで、年も自分より上。髪の色も顔形もあの子が言ってたのとぴたりと当てはまる。それに、黒目黒髪の子は珍しいからね。そうそう同じ人は見つからないよ」

そう、この世界、日本では当たり前すぎてあふれてる黒に遭遇する率が、ものすごく低い。私も今まで一回もお目にかかったことがないくらい。

ということは、やはり王子の言うことは本当…？？？

結果的に、私はますます王子との結婚に疑問をもつ結果となったのでした。

10　アレク王子の、二度目の来訪です。

少し寒くなってきて、私は思わず体を身震いさせる。
やっぱり夜は大分冷える。この辺りで今日は眠ることにしようか。
読みかけの本に栞を挟むと、私は大きく伸びをした。途端に体がばきぼきっといい音を立てる。
かなり長い時間、同じ姿勢で居続けたから当然だろうけど。
それから本を元の棚にしまい、ベッドに体を滑り込ませようとした時でした。
コンコンッ。
唐突に、扉がノックされた。
「！？」
こんな時間に誰だろう？リースンは、夜も遅いからと早くに自室に返したから、彼女だろうか。
私はあまり疑問も持たず扉の前に立つと、鍵を外した。
「リースン？」
けれどそこにいたのは彼女ではなく。
「やあ、エリさん」

満面の笑みを浮かべていた、アレク様…もとい私の旦那様でした。

……お昼にハーベイ様に聞いた話を思い出しました。

私は覚えていないけど、王子は一度会っていて、それ以来私と結婚したくって王様にお願いしたってやつ。

あの後、真相を確かめに王子に会いに行ったんだけど、あいにく留守だった。なので次に会ったらそのことを聞いてみようと思っていたのだ。

確かに、今目の前に王子がいるというのは、聞きだす絶好のチャンスではあるんだけど。

それよりも、私は現状にびっくりしていてそれどころではありませんでした。

「!?え、えっと、アレク様???」

そう、それは今の時間。

時計を見れば、もう2時を回っている、そんな深夜と言っても過言ではない時間帯。もちろん、１４歳の少年が起きている時間でもなければレディーの部屋を訪ねるのにも相応しくないお時間。

「どうされたんですか、こんな遅くに」

私の抱いている疑問はさておいて、とりあえず、外ではなんなので部屋に招き入れてからそう尋ねると、王子はあどけない表情のまま答えた。

「うん、たまたまエリさんの部屋の前を通ったら、明りが洩れていたから顔が見たくなって」

え、だって2時だよ、2時。草木も眠る丑三つ時、って言われるほどの時間だよ？それなのに、こんな時間にふらふら廊下を歩いているなんて…。あなたは不良少年ですか。

「……アレク様、その、お部屋に来て頂けたのは嬉しいですが、今日はもう自分のお部屋にお帰りになられた方が」

けれど私のそんな言葉も、王子には全くの馬耳東風なようで、すっぱり無視するとベッドにごろんと横になった。

「！？」

それ、私のベッドなんですが……。

「あ、あの」

「ここで寝るからいいよ」

いや、だめですって！！！なんてことを仰るんですかこの人は！！

「だって今朝も一緒に寝たじゃない」

いやいやいやいやそれは、王子が勝手に忍び込んで来たんですよね！？私の断りもなしに。

「とにかくっ！！駄目なものは駄目です！！！」

きっぱり言うと、王子を起こすべく私はベッドに歩み寄り……

「って、あれ、アレク様？？？」

そのまま横になった王子は、ピクリとも動かない。

目をつぶって横になっている。

嫌な予感がしたので試しに揺さぶってみるけど、起きない。

やがて口から洩れたのは、規則正しい寝息でした。

「……」

いや、寝るの、早くないですか？

そんな、5秒と経たないうちにっていう勢いでしたけども。

うーん、どうしようか、まさか眠る王子を部屋に追い出す訳にも行かないしなぁ。

しかし、こう改めてまじまじと見ると、王子は本当にお美しい顔をしていらっしゃる。

おとぎ話の王子様も、ギリシャ神話の神様たちも裸足で逃げ出すほど。

今ですらそんな感じなんだから、もうすこし大人になればそれはもう、ものすごいことになりそう。

と。

私は今にして、初めて気が付いたことがあった。

象牙のようななめらかな白い肌。こころなしか、それが青白い。

「……」

眼の下には、うっすらと黒い影。おそらく、クマと呼ばれる代物。

「……」

彼は１４歳だ。でも、それにしてはこのやつれぶりはどうなんだろう。

顔と雰囲気と、まるでそぐわない。

そう言えば。

私はさっき部屋で見た光景を思い出す。

部屋中に積み上げられた、いかにも難しい文面の書類の山。

ハーベイお兄様と険しい顔で話されていた王子。

そしてアレク様は将来を担う未来の国王様。

リースンも、王子は幼い頃から職務をこなしていた、って言っていた。

ならばこんな遅い時間まで、アレク様が起きて何をしていたかなんて、想像に難くない。

むしろ、一番初めに気が付くべきだった。

それに昨日この部屋に忍び込んできた時も、夜遅く、って言っていたし。

そんな時間になるまで、王子は王子としての職務を全うしていたんだろう。

道理で疲れるはず。

そのまま横になったら寝てしまうはずだ。

ならば寄り道なんてせずに、自分の部屋に戻ればよかったのに。

なんでそれをしなかったのか。

その理由を考えて、それから思い当って私は思わず赤面する。そして、

「……はぁ」

深い深いため息。

もしもハーベイお兄様の言う通りなら。アレク王子の言葉のままを信じるなら。

アレク王子は、本当に私に会いに来たのだろう。

「はぁぁぁ」

部屋にはソファもある。私一人眠るには十分すぎる広さだ。

私は深いため息をもう一度つくと、王子が風邪をひかないように毛布をかぶせてあげて、ソファの方へ足を向けました。

11　そんなに違うんですか、アレク王子は。

あれから2週間が経ちました。

あれ、というのは、もちろん、アレク様と私の結婚式から、ですが。

私は未来の王妃としての教育を受けないと、ということで、最近始まった試練の数々に耐えている。

今はその中の、いかに美しくドレスを着こなすか、という、私にとってはあまり必要性を感じないもの。

けれどリースンいわく、これはすごく大事なことらしい。

一国の王妃とは国を代表する者、つまり国の顔なんだから、ドレスの着こなし方、歩き方一つとっても優雅で美しく洗練されていなければいけないと。

そして今は、まずは自分に合うためのドレスを作っている最中なんだけど。

そのさなかに、侍女の一人が興味しんしん、というオーラをありありと醸し出しながら聞いてきました。

「あの、エリ様。最近、あのアレク様が、毎夜お部屋に通われて一緒に寝ているっていうのは本当なんですか？？？」

「……ええ、はい、そうですね」

あれは結婚式の次の日。真夜中にアレク王子が訪ねてこられた後、

王子は私のベッドで眠ってしまったので、私は仕方なくソファで寝ようとしたんだけど。

王子がしっかりと私の服の裾を掴んでいたおかげでその場から離れられず。

そして私もいい加減眠たかったので、一緒のベッドで寝ましたとも！！

というか、その前の日にも同じベッドで寝ていたんだから、この際1回も2回も変わらないかなと開き直ってしまい…。

それから、王子は職務が終わってから、毎晩夜中に私の部屋を訪れて一緒に眠る日々が続いている。

なので最近は起きて待ってはいるんだけど、どうしても睡魔に耐えられない時は先に寝て…。朝起きると、アレク様が隣にいたりする。

だって王子は私の部屋の合いカギを持っているし。どうやら、結婚式の夜も、それを使って忍び込んで来たらしい。

慣れてしまえば一緒に眠るのも案外平気なもので、初日にあれだけ大騒ぎしたのはなんだったんだろうと言いたいくらい。

……まあ、旦那様っていうより、可愛い弟ができてその子と寝てるっていう感覚が近いと思う。

一緒に寝てるからと言って、勿論、そういうごにゃごにゃがあるはずもないですよ！？本当にただ一緒に眠るだけなのだから。

ちなみにこの質問、既に何回聞かれたかわからないくらい。

彼女達の他にも、礼儀作法を教えてくれる先生や、お城の他の侍女たち、それに王様や王妃様、第２王子のマエスト様に第１王女のマリア様まで。

別に結婚した相手が妻の部屋に通うのは当たり前のことなんだけど、それでもこれだけ話題に上がるのは。

一つは王子の年齢。１４歳という、まだ若い年齢があるんだけど。

もう一つは…。

「そんなにアレク様は昔と違うのですか？？？」

その度に、何度と返した私の質問。

すると決まって返ってくるのがこの答え。

「それはそれは！！あんなアレク様は、以前では考えられませんもの！！」

アレク王子が昔、感情がなくてお人形のようだっていうのはハーベイ兄様から聞いた通り。

王子としての職務を淡々とこなし、何事にも執着せず、日々をただ漫然と生きているだけだったというアレク様。顔は綺麗なのに全く表情がないから、余計に人形の様だと。

そんな王子が、自分の意思で私と結婚したいと王様に直談判しに行き、結婚したいがために２年で留学から帰ってきて。

感情も表情も豊かになって、仕事を生き生きとこなし、その上終わったら毎日私の部屋に通う、なんていうことは、昔から考えたら、本当にあり得ないらしい。

「アレク様をあんな風に変えるなんて、一体どんなことをされたんですか？」

「あんな風、ですか」

いつも嬉しげに、満面の笑みを浮かべて部屋にやってくるし、寝ている時の表情もあどけなくて可愛らしい。時々夢の中で嬉しいことでもあるのか、笑ったりしている。

朝起きて、寝ぼけた瞳をこすりながら、おはようと私に言ってくる時は、どこかほわんとした穏やかな顔。

……私には、今の王子しか分からないのでなんとも言えませんが、少なくともみんなの言う昔の面影は、全く目に見えません。

その上、それを変えたのは私だって言うけれど、やっぱり王子と会ったことを思い出せないので、どんなことをしたのかって聞かれても困る。

王子には、実はそのことをまだ聞けていないのだ。

部屋に来るのがいつも遅い時間なので、早く王子を寝かせてあげないと、という思いが先行して聞けずじまいなのだ。

それに、王子は部屋に来ると大体すぐにこてんと眠ってしまうので、会話なんて本当に、いつも5分ほどだと思う。朝起きたら、すぐに部屋を出て仕事しに行かれるし…。

まあ、いつか聞ける時間ができるだろう、その時に聞けばいいか、と今は思っている次第なのです。

１２　きちんと向かい合うのは、今日が初めてですね。

そして、その機会はその日の夜にやってきました。

いつものように、本を読んでいると。

扉がノックされた。

時計を見ると、まだ１２時も回っていない時間。

日付も変わっていないのに、まさかもう？

そう思い扉を開けると。

「エリさん！！」

予想通りのお方が私の部屋の前に立っていました。

「今日はずいぶんと早いんですね」

いつもなら日付が変わってからここに来られるのに。

すると王子は、にこりと笑って答えました。

「うん、思ったよりもはかどって。そのお陰で今日は早く仕事が終わったんだ」

だからエリさんに会いたくて急いで来たんだよ、そう王子は言ってくれた。

うん、それはすごく嬉しい。気持ちは嬉しいけど、でも。

私は相変わらずの王子の様子に、思わず苦笑しながら口を開きました。

「…だからと言って、いつもそのような格好だと風邪をひきますよ？」

そのような、とは、このお風呂上がりの格好。

湯冷めしてしまうんではないかっていうほどの薄手の生地の服に、まだ濡れたまんまの髪の毛。廊下に少し、ぽたぽたと水の滴が落ちるほど。

水も滴るいい男…というには幼いけど、でもそんな表現がぴったり。けれどいくらそうだとしても、まさかこのままにしておく訳にもいかない。

私は急いで部屋に招き入れると、椅子に座らせる。

それから部屋の隅にかけてあるタオルを持ってきて、王子の頭の上にかぶせると、ごしごしと拭いてやる。

「いつもごめんなさい、エリさん」

「そう思っているなら、きちんと髪の毛拭いてきて下さい」

この世界、電気がないからドライヤーなんてものも存在しない。だから王子が風邪をひかないように、しっかりと念入りにタオルで水気をとる。

拭きながら王子の髪の毛をまじまじと見るのが、実は密かな楽しみ

だったりするのだけど。

だって日本ではなかなかお目にかかれない、綺麗なブロンドの髪。しかも全く痛んでなくて、すごく羨ましい。

私なんて、一度も染めたことないのに枝毛、ありまくりだし。

やがてそれが終わると、私は元の場所にタオルを戻して、ベッドの毛布をめくる。

すると王子がその中に体を潜り込ませて、私は燭台の火を消してそのまま眠る…っていうのがいつものパターンなんだけど。

今日は少し様子が違った。王子はその場から動かないで座ったまんまだ。

「？まだ寝られないんですか」

「うん。だって今日はいつもより早いんだし、エリさんとお話ししたいなぁって」

「でもいつも遅いんですから、たまには早く寝た方がいいんじゃないですか？」

ばらつきはあるけど、平均睡眠時間は5時間はきってると思う。

毎日過酷に仕事をこなす14歳の王子様には、その睡眠時間じゃ足りないんじゃないだろうか。そう思っての私の発言だったんだけど。

アレク様は途端に頬を膨らませた。

「大丈夫だよ、全然平気だから」

「ですが…」

なおも食い下がる私に、王子は今度は悲しそうな顔になると目を潤ませて、瞳をうるうる攻撃してきた。

「……」

だから、本当にその目は卑怯だ。そんな顔されたら何も言えないじゃないですか。

ちなみに今のところ、愛玩動物のような視線の王子には全敗中だ。

私は諦めのため息をもらすと、ベッドを元通りに直し、王子の前に座りました。

そう言えば。

向かいあってみて気が付いたんだけど、こうしてアレク様ときちんと向き合うのって今日が初めてかもしれない。

毎日ここに来てくれるけど、時間も時間だから会話もそこそこにすぐに眠りにつくし、朝は朝で時間がないから、話なんてほとんどできない。

なんだか変な感じだ。

結婚して、一緒に寝てるのに、今までほとんど会話したことがないだなんて。

そしてアレク王子もどうやら私とおんなじことを考えていたようで、

小さく笑い声を洩らすと嬉しそうに私へと視線を送った。

「そう言えば、せっかく結婚したのに、こうしてエリさんとお話しするのって初めてだよね」

「そうですね」

「お城での生活は、もう慣れた？」

「はい、みなさん優しくして下さるので…。アレク王子こそ、大変ですよね。毎日朝早くから夜中までだなんて。その、体調とか大丈夫ですか？」

「うん、僕は別に平気だよ？もともと体は強いし、それに」

そこでいったん言葉を区切ると、まんまるな青い瞳で私をじっと見つめ、

「エリさんの顔を見たら、疲れなんて吹っ飛ぶよ」

そしてとどめに花がほころぶ如く甘やかな笑顔を向けてきた。

「……っ！？」

…その破壊力に、私は思わず椅子の上で突っ伏す。

い、今のは反則だ、絶対に。

なんですか、あの、あの、あの極上の微笑みは。

やばいぞ、眩しすぎて溶けそうになる。

最近は見慣れてきた王子のお顔だけど、こう、不意打ちで来られると反応に困る。

それが自分に向けられているものだと思うと、恥ずかしいし照れるし、こう、胸の奥がむずがゆくなる、そんな感覚…。

だけど、照れてどうする、私。

相手は大きく年のかけ離れた男の子。そんな子に本気で赤面するなんて、私は駄目な大人だ。

しかりしろ、私！

心の中でエールを送ると、私はなんとか平静を装う。

「そ、…それにしても、アレク様は昔からそんなにたくさんお仕事されてたんですか？」

「うん。僕が次期国王になるって決定した時からこんな感じかな」

なんでもない風にそう答えるアレク様。

確か、幼い頃から国の中枢部の政務をこなしていたんだっけ？

その時は、今もそうだけどもっと幼い頃だっただろうに…。

辛くはなかったんだろうか。

嫌ではなかったんだろうか。

だけどそんな私の疑問に、王子は少しだけ遠い目をすると。

「与えられた仕事をこなすのは、苦ではないんだ。それが当たり前だって思ってたし、その能力が認められて次期国王になれって言われた時も、何の感慨も感情もなかったていうか…。ああ、そうなん

だってぐらい」

あの頃は本当に、感情がなかったからね。

そう言った王子の言葉と、みんなの言っていた昔の王子の姿が重なりました。

『感情のなかった王子様』

けれど、今目の前にいる王子は、すごく感情が溢れている。

嬉しい顔、拗ねた顔、悲しい顔…。

そしてそれを作り出したきっかけが、私だっていう事実。

これは、今王子に尋ねる絶好のチャンスなのではないだろうか。

どうして王子は私を選んだのか。

そして、本当に私がアレク王子を昔の人形のようだったものから変えさせたのか。

私はゆっくりと息をはくと、思い切って王子に尋ねてみることにしたのです。

13　私、アレク王子とお会いしたことが…？

「アレク様、王子が私との結婚を、国王様にお願いしたというのは本当なのでしょうか？」

私は王子の顔をまっすぐ見据え、そう切り出しました。

するとアレク様は、静かな口調で、でもきっぱりと答えました。

「うん、そうだよ。だってずっと前からエリさんのこと、好きだったから」

アレク様の顔はいつもと変わらず微笑んでいて。

でもどこか真剣みを帯びた瞳に、私は思わず鼓動が速くなるのを感じた。

なんでだろう、7つも年下の可愛い男の子なのに、今目の前にいる王子はまるで。

知らない男の人、みたいで…。

「っ、で、でも私……」

なんとなく、そんな王子を見ていることに耐え切れなくなって、私は視線を逸らしながらそれでも言葉を続けようとする。

だけど、そんな私の台詞は、アレク様は途中で遮った。

「知ってるよ？僕のこと、覚えてないんでしょう？」

「……」

まだ、私は何も言っていない、いないのに、なんで分かったの？？？

私の疑問をよそに、王子はおかしそうに私を見やると、

「だってエリさん、そのことみんなに言ったんでしょう？僕がエリさんと結婚したいって言ってたけど、自分はあった記憶がないって。ハーベイが『どういうことなんだ！？』って直接聞きにきたし。それにほかの人間にも聞かれたからね」

……ああ、確かに言いましたとも。

そして、いろんな人に。

その話がアレク王子の耳に入るのは、むしろ当然のことですよね、うん。

「僕はエリさんと昔会ったことがある。会話したこともあるし、短い間だったけど一緒に過ごした。その時間が、今の僕を作ったし、かけがえのない僕の宝物なんだ」

いや、でも私本当に記憶がないんですが。

もしかして、それ、私に似た別人、ってことなんじゃないでしょうか。

ハーベイ兄様は否定されてたけど、やっぱりそれしか考えられない！！

そう、言ってみたものの。

「間違えるはずないよ。エリさん、君だよ」

全否定されました。

それなら、あのタイムラグの謎はどう説明するんだろう。

王子の言葉を信じるなら、私と出会った時、私はこの世界には存在していなかったはずなのに。

かといって、それを言ってしまうと、私がこの世界の人間じゃないとばれる…どころか、そんな絵空事みたいな空想話する頭のおかしい人、みたいに思われてもおかしくない。

普通ひくよね？

私、異世界から来ました、なんて言ったら。

だから私はもう一度尋ねてみた。

「本当の本当に、私、なんですよね？」

「うん、もちろん」

けれど、やっぱり王子は私だと思っているようで。

うーん、そうだとすると、私が完全に忘れてるってことだよね？

アレク王子の言ってた頃って、私何してたっけ？？？

確か、まだぎりぎり高校生だったよね？大学合格が決まって、うはうはしながら新しい生活を夢見て……。

夢見て……。

ん？

んんん？？？

私、大学合格決まってたよね？それを自分で直接確かめに行った……はずなんだけど。

でも、合格発表を教えてくれたのはお兄ちゃんで…。

え、あれ、嘘、ちょっと待って。

なんだろう、この違和感。

あの頃の記憶が、なんだかおかしい。

言葉でどう言ったらいいかわからないんだけど、とにかく変なのだ。

何が変なのかもわからない、だけど異常だ。

合格発表の時もそう、それからその時期に私、車に轢かれたことがある。

その時の記憶は、私がふらふらして車道に突っ込んで、そのはずなんだけどもう一つ別の記憶があって、誰か、お兄ちゃんが轢かれそうになるのを庇ったからだった気もする。

待って、お兄ちゃん、だったよね、あの人。

いやでも、私一人で学校帰りだったからお兄ちゃんがいるはずないのに。だってあの時お兄ちゃんは昼から深夜までのアルバイト生活で顔を合わせることなんて滅多になくて……。

「…エリさん！！！」

はっと。

耳元で大きな声がして、私は我に返りました。

見廻すと、そこは最近になってようやく見慣れた、お城での私の部屋。

そして気付いたら、すぐ目の前には、まだあまり見慣れない青い瞳の男の子が、心配そうな様子で私を覗きこんでいました。

……どうやら、深い思考の海に潜っていたらしい。

過去のことを思い出そうとするうちに、妙な矛盾点に気が付いて、その原因を探ろうとして。

「ごめん、なさい、アレク様のこと、私覚えていなくて。それで思い出そうと過去に意識を飛ばしていたらしく。あ、でも、ちょっと妙な事があるというか、もしかしたらそこに王子との記憶の手がかりがあるのかもしれませんので」

ですから少し待って下さい、そう言おうとした私の口が、なぜか塞がれました。

１４　分かりました、もう諦めます。

「！？」

一度目と同じ、ひんやりとした感触。

突然押し付けられたそれに、私はただただ呆然とするしかなく、身じろぎせずにその場に硬直する。

何が起こったかなんて聞くまでもありません。

時間にしたらほんの数秒、でも私には永遠と思えるほどの時間が経って。

すっとアレク様の体が離れました。

「ア、　レク様…？」

私はどうしたらいいかわからずぽかんとした顔で王子を見て。

それから思い出したように顔に血が上ってくるのを感じた。

い、一度したことがあるとはいえ、こう、恥ずかしい。

いえ、夫婦なんでそういう行為は全然おかしくないし、当然なんだけど、その、まだあんまりその実感もないし、やっぱり恥ずかしいし照れるし、えーと、それに、なんで今のあのタイミング！？！？！？

だけど王子はそんな私とは対照的に、極めて冷静、でした。

「ごめん。こうでもしないとエリさん黙ってくれなさそうだったから」

いつものように、自分の可愛さを武器にしてにっこり微笑んで…なのに、なぜなんだろう。その顔が、とても、とても苦しそうなのは。

それを見て、私はすぐ喉元まで出かかった、だったら手で押さえるとか、少し黙ってって口で言うとかいろいろ方法があるでしょう！！実力行使ではなくて、っていう言葉を呑みこみました。

私が黙って王子を見つめていると、アレク様もまっすぐに私を見返してきた。

「……エリさん、あなたが僕のことを覚えていないのは、すぐに分かったよ。でも、それでいいんだ。そのまま、忘れていてほしい。絶対に思い出さないでほしいんだ」

「え……」

思い出さないで、って。

「それはなぜなんですか？」

普通は思い出すのにこしたことはない。

私の2年以上前のあの記憶の矛盾の部分に、もしかしたら王子が関わっているかもしれないのに。

いや、もしかしたら、ではない。

今の私は、確信していました。
絶対に、そこにアレク王子との記憶の接点があるって。
なぜ忘れたのかは分からないけど、何かがあったって。
それなのに思い出さないでってどういうことなんだろう。
「ごめんね、理由は言えないんだ。…でも、僕はこうしてエリさんが僕のことを忘れてくれていて、ほんとうによかったって思っているんだ」
「よかったって…」
アレク王子は笑っていた。
とても満たされた顔で、心の底から嬉しそうに。
私のことが好きだと言いながら、私が王子のことを覚えていなくてよかったと。
「ですが！！」
私は思わず声を荒げる。
忘れたままでいいなんて。そんなこと絶対にない。
私は思い出したい。王子と昔出会ったこと、自分の記憶を。
なのに。
アレク様は、目線を合わせるように屈んでくる。それからぎゅっと手を握ると、聞き分けのない子供をあやすように言ってきたのだ。

「お願い、エリさん。言うこと、聞いて？」

その声は掠れていて、天使のような相貌は今にも泣き出しそうで。

……私が王子とのことを思い出すことは、彼をこんなにも苦しめてるんだって分かった。

なぜかは分からない。

でも、私にはできない。

アレク王子をこれ以上悲しませることなんて。

王子に、これ以上こんな顔をさせるなんて…。

王子がいいと言うのだから、もういいのだ。

確かに私は思い出したいっていう気持ちはあって、それは思い出せない自分が気持ち悪いって言うのもあるんだけど、一番はアレク王子のために、っていう理由。

だって、もしもこれが逆の立場なら、私は堪えられない。

自分は覚えているのに相手は記憶になくて。

それってすごく悲しくなる。考えただけで、胸の奥がぎゅっと苦しくなる。

覚えていない私はまだいい。

だけど、アレク王子はどんな気持ちでここにいるのだろう。

どんな想いで私と接しているのだろう。

そう思ったから、なんだけど。

覚えてなくてもいい、その方が嬉しいって答えた王子の言葉に、嘘はなかったから。

本当に喜んでいたもの。

だったらもういい。

なんで思い出さない方がいいのか、一体過去に何があったのか。

考えないことにする。

これ以上、私は詮索しない、思い出さない。

私は王子の言葉に、こくりと頷いたのでした。

１４．５　アレクの願い

本当はあなたのこと、全部知っているんだ。

エリさんが２１歳だってことも、この世界の住人じゃないことも。

そして、僕に関する記憶がないことだって。

当たり前だよ。

だって、それは僕自身が望んだことだったんだから。

神様なんて信じていないはずだったのに、あの時、たくさんの管につながれて、眠っているエリさんを見て、僕は心から神様にお願いしたんだ。

お願いです、エリさんを助けて下さい。

あの人が助かるなら、僕はどうなってもいい。

僕があの人と一緒にいたから、彼女がこんな苦しい目に遭ったんだ。

僕の痕跡を、この世界からなくしてもいいから、だからどうか、あの人を…！！

僕の祈りが通じたからなのかはわからない。

ただ、エリさんは目を覚ました。

もう駄目だと言われていたのに、奇跡的に一命を取り留めた。

だけど。

代わりに、僕に関する一切の記憶をなくしていた。

それで構わない。

僕との記憶がなくなった代わりに、エリさんはその命を、この世に留めておくことができたんだから。

だから、どうか思い出さないで。

もし思い出してしまったら、記憶の代償としてエリさんの命が今度こそなくなってしまうんじゃないかって思うんだ。

そうなったら、僕は……。

15　ずっとこのままが、いいですが。（前書き）

あれから数か月、時が流れました。

15　ずっとこのままが、いいですが。

窓の外を見ると、すっかり景色は冬模様。

葉っぱはすっかり抜け落ちて、今は寂しく枝が揺れているだけ。

空は灰色で厚い雲に覆われていて、今にも雪が降りそうな気配がします。

「ううう、やっぱり冬は嫌い…」

横を見ると、アレク様が首をちぢこませてもう一度シーツの下に潜り込ませていました。

「もう起きる時間ですけど、いいんですか？」

「だって寒いんだもん」

くぐもった声を聞きながら、私は苦笑する。

この世界にも日本と同じ、四季、があって、今はその中でも一番寒い冬、の季節。

ですがどうやらこのお方、寒さにめっぽう弱いらしく、最近は朝目を覚ましてもなかなかベッドから出て行かない。

こうなったらいつものあれ、かな？

私は一人、寝台から立ち上がると、部屋の扉を開けて侍女を呼ぶ。

…しかし、部屋は薪をたいてるからいいけど、廊下は本当に冷える。

もとが石で造られているので、夏はひんやりと涼しいけど、代わりに冬は冷え込む。

私が軽くぶるぶる体を震わせていると、やがて待ってましたとばかりにリースンがあるものを持ってきてくれた。

いつものことなので、用意は万端だったようだ。

私はお礼を言い、それを手にして再び部屋の中にカムバック。

はぁ、あったかい。

部屋の中もそうだけど、手にしたそれも、冷えた指先を温めるのには十分。

私はそれを2つ、テーブルの上に置くと、アレク王子の元へ行き、思いっきりシーツをひっぺがしました。

「さあ、起きて下さい！！いつもの、用意しましたから」

すると、それを聞いた瞬間ぴくりと反応させると、アレク様はもそもそと寝台から這い出してきた。そしてテーブルの上のそれを手にとると、満足気な顔で口に入れた。

「うん、やっぱり朝はこれだよね」

甘い香りが漂うそれは、ホット・チョコレートと呼ばれる代物。温めたミルクをチョコレートの上に注いだその飲み物は、アレク王子の大好物らしい。

そして私も昔から大好きな飲み物なのだ。

これを飲むと、昔お兄ちゃんと一緒に暮らしてた頃を思い出す。
あの時のお兄ちゃんは某チョコレート会社の工場で働いていて、よく余ったチョコを持って帰ってきてくれた。

それがいつもあまりにも大きいので食べきれなくて、そういうときは牛乳に溶かして飲んでいたっけ。
ココアより濃厚で、とろとろなそれを飲みながら、ふと向こうの世界に思いを馳せる。

うーん、多分、私がこっちに飛ばされてきた時とこちらの季節にズレがなかったことからして。
季節も、あっちも今頃は冬かな。

お兄ちゃん、風邪、引いてないといいけど。
体だけは丈夫って豪語してて、実際その通り、病気なんて一度もしたことのない頑丈な人だから、あまり心配はしてないんだけど。

「ごちそうさま、それじゃあそろそろ行ってくるね」

私が感慨深げにカップを見つめている間に、アレク王子はとっくに飲み干してしまったみたい。

相変わらず早い。

さっきまで眠たげだった瞳には、今は光が宿っていて完全に目を覚まされたらしい。

かたんとテーブルにカップを置くと、軽く上着を羽織り、私に向かっていつものように頬に軽く口付けを落とす。

まだ若干の照れはあるけれど、さすがに一時期のように顔がゆでダコ現象になることはない。

「今日は遅いんですか？」

「うーん、どうだろう。少し溜まってる案件があるからそれの進み具合にもよるけど…。夕方までには終わらせて、一緒にご飯、食べたいなぁ」

「分かりました。できるだけお待ちしています」

いってらっしゃいと。私がお決まりの言葉を投げかけて、王子が部屋を出て行く。

そして、出て行ってから１０秒もしないうちに入れ替わりに入ってきたのは、リースンだった。

「……相変わらず、仲睦まじいことでようございますわね」

「はあ、まあ否定はしませんが」

「国王陛下が、もうじき孫の顔が見られるから楽しみだと仰っておりましたわよ？」

「ぶっ！？」

思わず、私は口に含んだ生暖かいそれを吐き出しそうになって。

必死にこらえました。

死にそうになりながらそれを飲みこむと、私は彼女に向かって一言。

「いや、それは絶対にないですから」
私と王子の仲はとてもいい。
それは自覚しているんだけど…。
残念ながら、私達は未だに清い関係です。
いやいや、仮に夫婦とはいえ、やはり私的にはあんないたいけな美少年とそんな関係を持つとか、無理。
それにアレク王子も特に何もしてこないし、強いて言うなら、朝のほっぺちゅー儀式とか、それくらい。
口にキス、とかはあれ以来ない。
……あの夜の、過去の話をした時が最後。
もちろんあれから私は、宣言通り過去の記憶について聞くのも思い出すのもやめた。
だから結局私にはアレク王子の変貌理由は分からずじまい。
それでも、それからも王子は毎日、こうして私の部屋に立ち寄ってくれる。
一緒に眠って、朝起きて、たまにご飯を一緒に食べて。
それからたまのたまにできた休みの日には、2人で一緒に過ごす。
特に何をするでもなく、部屋にいることもあれば庭に出ることも街に行くこともあるけど。
一緒に過ごす時間はとても心地よい。

この関係が、私はすごく和む。願わくなら、一生そういうのがいいな。

そういった、生々しいことはこの先ないという方向で。

そうぽつりと呟きを洩らした私に、リースンは無理です、と一刀両断しました。

「次期国王と王妃の間に子供を作らないなんて、あり得ませんから」

「……そんなこと、分かってます」

それは私が一番よく分かってる。分かってるんだけど…。

実は前に、そのことについて王子に尋ねたことがあった。

すると。

「いくら夫婦でも、僕は無理強いは嫌だな。だから待つよ。エリさんが僕のこと、そういう目で見てくれるまで」

にっこりとそう仰ったアレク王子は、正直私なんかよりもよっぽど大人に見えて。

だって、そういうのはその、年上が言うものだと思うんだけど。

中学生のような子にそんなこと言われる大学生って…どうなんだ！？

そう、自身にツッコミを入れたけど、私的にはその方がありがたかった。

立場的には、あちらの方が上。

求められれば私に拒否権などない。なのに、王子は待つ、と言ってくれたのだ。

ただ、最後に小さく付け加えられた台詞は。

「だって僕達はもう夫婦で、エリさんは僕から逃げられないんだし。あなたの気が済むまで待っててあげる」

…正直怖かった。しかもその笑顔がめちゃ輝いていましたし。それにその笑顔の裏に黒いものが見えたのもきっと、気のせいじゃない。

「それにしても…エリ様はアレク様のこと、どう思われているのですの？」

「……それは」

アレク王子のことは好き。

絶対に7歳年下なんて、男として見れない、なんて思ってたけど、意外にそうでもなくて。

だって考えてもみてほしい。

いい年して恋愛偏差値0の女の子が、いきなり美形の男の子に好きだ、とか言われ。

しかもその子が毎日、どんなに遅くなっても顔を見せにきてくれて…。

正直、ドキドキする。

いくら可愛らしい相貌だとしても、男の人は男の人。

そういう目で見てないことはない。

けれど、どう思っているのかと聞かれれば、分からないというのが私の素直な感想で。

だって本当に分からないんだもん。

これが一体どの種類の好きなのかは。

ただ、アレク様が私のことを、好きって言ってくれてるのとは、少し違うと思う。

だからこそ、アレク王子はあんなことを言ってくれたんだろうけど。

「まあなんにせよ、まだアレク様は１４歳。さすがにそういったことは早いとは思いますわ。ただ、あの方も男の方。いつその誓いを破ってエリ様に襲い掛かってくるやもしれませんから、その点はお気を付け下さいませ」

「ま、まさか」

アレク王子に限って……とは、言えない。いくら外見が可憐な少年だとしても。

「男はオオカミなのですわよ？例えそれが１４の少年だろうと、６０の老人だろうと、変わりはありません。そのことを、ゆめゆめお忘れなきよう」

オオカミ、か。

そう言えばそんな歌、あったなぁ。
男はオオカミなのよ、気をつけなさい、ね…。
どこの世界でも、それは共通の事実らしい。
でも、気をつけようがないと思うんですが。
だって一緒のベッドに入ってるんでしょう？一晩中一緒にいて、その、そういうことがあった時、私は一体どうすれば……。
例えば助けを呼ぶために大声で叫ぶ、とか？？？
ちらりと侍女を見やれば、彼女は私の考えを読み取ったかのようにばっさりと一言で切り捨てました。
「夫婦の情事に立ち入るほど、無粋な真似は致しませんわ」
それって。
……。
じ、自分でなんとかしろってことでしょうか！？

15　ずっとこのままが、いいですが。（後書き）

男はオオカミなのよ、が出だしで始まるあの歌…。今の若い子は知ってるのか、少し不安です…。

１５．５　アレクと二人の王子（前書き）

ここでのアレク王子、少し毒吐き気味です。

15．5　アレクと二人の王子

僕がいつものように国王の元へ足を運んでいる途中、廊下の端に、見覚えのある長い金髪頭が目に入った。

「あ、アレク！！」

もちろん僕はそんな声はさくっと無視すると、足を緩めることなく先に進む。

なのに、あの男は懲りもせず僕に声をかけ、挙句の果てに追ってきた。

「無視はさすがにひどくない？」

「仕事以外で馬鹿と会話する時間なんて、持ち合わせていないから」

「酷いよね。俺は君のこと、好きなのにな」

「気持ち悪いんだけど、ハーベイ」

僕より9つ年上の兄の顔を見上げて睨みつけると、僕はきっぱりと言った。

「エリちゃんには優しいのに、実の兄にそんなに冷たい反応するなんて…」

「当たり前でしょう？なんでぼくがハーベイなんかに優しくしないといけないのさ。そんな無駄な労力払う必要がどこにあるの？」

「相変わらず冷たいことで。あ、そういえば、彼女の元には、甲斐甲斐しく毎日通ってるんだってね。仲がよろしい様で、兄としては嬉しいよ。父さん…っと、国王も言ってたぞ？もうすぐ初孫の顔を見られる日も近いんじゃないかってね」

その台詞。

王妃様にも言われたし、マリア姉にも言われたんだけど。

「……悪いけど、そんなのまだずっと先の話だよ」

「やっぱりまだ手出してなかったんだね」

「僕はどこかの色情男とは違うから。見境なしにけだもののように手を出したりしないよ」

「実の兄に向って失礼な奴だな」

「自分のことだって自覚あるんだ」

大体、僕にはとっくに成人した兄が2人もいるのに、国王が初孫を求めるのは、どちらもその気配がないからだ。

今年で23になるハーベイは、その顔立ちと女の子に優しい性格でもてる。

そしてもてるが故に一生色んな女の子と遊びたいと豪語している最低人間で、現在も未婚。

二番目の兄であるマエストは、22歳だけど、こちらも結婚の予定なし。

ハーベイとは真逆で、極めて硬派すぎる。

今軍部の長官なんだけど、もしも戦争が起こって自分が死んでしまったら、残された家族が可哀そうだから結婚しない宣言をしている。

戦争なんて、ここ何十年も起こっていないのに。

ちなみに2人は王の座を継ぐ訳でもないので、国王も放任している。

２０になるまでに結婚、という決まりごとも、王族の前ではなんの効力も発揮しないらしい。

もう一人残っているマリア姉はまだ１８歳で、結婚はしていない。けど、いずれ他国へ嫁ぐ身だから初孫もその地で生むだろう。

だから、必然的に、みんなの注目は僕とエリさんになる訳なんだけど。

僕たちには、夫婦と呼ばれるところがする行為は、今のところ一切ない。

「でもさ、お前はエリちゃんのこと、好きなんだろ？」

「もちろん。好きだよ？当たり前じゃない」

好きじゃなきゃ、国王を脅してまで結婚なんてしなかった。

「だったら、それでいいの？」

「僕は今のままでも十分幸せだから、いいんだよ」

「じゃあこの先も、ずっとそのままの関係でいいの？」

この先…それはどうだろう。

さすがに僕も、エリさんに嫌われてるとは思ってない。

だけど、僕があの人に対するのと同じ気持ちだとも思っていない。

それでもいいって僕は考えてる。

エリさんが今はそれ以上を望まないなら、僕はそれ以上踏み込まな

い。
こうして、毎日エリさんの顔を見られるだけで、僕は十分満ち足りているんだから。
今のところは。
ただ、それで一生満足できるなんて思っていない。
もっと、それ以上、あの人に触れたくなると思う。
ううん、今でもそういう気持ちに駆られることはあるけど、ぐっと我慢してるんだから。
「その顔……やっぱりそういうことなんじゃないか」
否定はできない。できないけど、でも。
待つ、って宣言した以上、なるべく僕は彼女の気持ちが僕に追いつくのを待ちたいんだ。
その我慢がいつまで続くかは……分からないけど。
するとハーベイがいきなり肩をぐっと引き寄せると、小声で僕の耳に囁きかけた。
「いいか、アレク。男はみなそういう生き物なんだ。好きならそういう手段をとる。それは間違ったことじゃない。エリちゃんはお前のこと、満更じゃなさそうだし、そういうところから始まる愛も、俺はあっていいと思うんだ」
「……つまり、何が言いたいのさ」
「もっと自分の気持ちに素直になれ、ってことだよ」

「……下半身でものを考えている低俗な人間の言うことだね」
それから僕は、ハーベイを思いっきり廊下の端に突き飛ばす。
何が悲しくて、ハーベイなんかの囁き声を聞かなきゃならないんだ。
僕が聞きたいのは、エリさんの小鳥のさえずりのような可愛らしい声なのに。
それでも尚しつこく絡んでくる大馬鹿者の相手をしていると、僕の耳に聞きなれた声が届いた。
「こんなところで、何をしているんだ？」
「あ、兄さん」
予想通り、そこに立っていたのは僕の2番目の兄、マエスト兄さんだった。
ちょうどいいところに来てくれた。いい加減、ハーベイの相手するのも疲れてたところだったんだ。
「聞いてよ、ハーベイが僕に下世話な話をしてくるんだ」
「そうか、それは災難だったな。おい、ハーベイ」
「どうでもいいけど、2人とも僕のこと呼び捨てだよね？お兄さん、とか呼んでくれないよね」
本当にどうでもよかったから、僕らはもちろん無視。
マエスト兄さんはハーベイの方につかつかと歩み寄って向き合うと、灰色の瞳でじっと見つめる。
それからおそろしく低い、威圧感のある声で、ハーベイに向かって静かに言葉を発した。

「年端もいかない弟に、朝っぱらから公共の場でそんな話を吹き込むなんて、破廉恥だ。恥を知れ」
「いや、恥っていうか。だって気になるじゃない？マエストも気にならない？」
「気にならん。そういうのは当人同士の問題だ。他人が口を挟む問題じゃない。そんなことより、お前のとこの従者が血眼になって捜してたぞ。ハーベイがいないと報告書が作れないってな。ほら、行くぞ」
「え――――、まだ色々話を聞きたいのに」
ハーベイが不満げに口をとがらせたけど、マエスト兄さんは聞く耳もたず、彼の首根っこをがしりと掴んだ。
「それじゃあな、アレク」
「うん、ばいばい」
さすがはマエスト兄さん。
一瞬で会話を終わらせ、ハーベイを回収。
ずるずる床を引きずられるハーベイはまだ何か言ってるけど、マエスト兄さんの歩みは止まらない。
それにしても、ああしていると、どっちが兄で弟か分からないな。
顔立ちと雰囲気でいえば、間違いなく、マエスト兄さんの方が年上だ。
貫禄があるし、とてもじゃないけど２０代前半には見えない。
そんな二人の後ろ姿を見送ると、僕は今度こそ国王の元へと足を向

けた。

15．5　アレクと二人の王子（後書き）

麗しの3兄弟、この絡みを書きたかったんです！
マエスト王子をもう少し出したかったのと、唯一の王女マリアも出したかったんですが。
彼女はまた、別の機会の登場となります。

16　あの、なぜそんなに慌てられて…？

「大変よ――――っ！！！」

目の前のお花と剣山とにらめっこをしていると、突然、大きな声が部屋の外に響き渡った。

あの声は……。

なんとなく、あの方な気がして、ふいっと視線を扉に向けると、後ろに立つ先生に厳しい視線を頂きました。

「エリ様、よそ見しないでください」

「すみません」

けれど、私の予想は当たるもの。

声の主はまっすぐに私の部屋を目指していたらしく、突然バタンとドアが開いた。

軽くウェーブさせた、美しい金の髪を腰に垂らし、見事なボディラインを惜しげもなく晒すドレスを身に纏ったその方は、私を見るや否や金切り声で叫びました。

「ちょっと、何してるのよエリさん！！」

「えっと…何と言われましても、見ての通り」

慣れない手を必死に動かして、いけばなを教わっている最中です。

まさかこの世界にもそんなものがあっただなんて、予想外だった。

このいけばなもまた、未来の王妃として必要なスキル、らしい。
なんでも、美しい花を自分の手で活けることによって、美的センスを養うんだとか。
「もう！そんな悠長な事言ってる場合じゃないよ！！」
けれど。
美貌のお姫様はそう言って私に走り寄ると、手をぎゅっと掴んできた。
「えっと…？」
そしてそのままの状態で、私を勢いよく立ちあがらせると、部屋の外へと連れ出そうとする。
「え、え、え！？！？」
なんだろう、これ、今は一応お花の勉強中なのに、突然の拉致！？
けれど、混乱していたのは私以外にもいて。
背後にいたお花のこわぁい先生が、ヒステリックな声を上げた。
「授業の邪魔をするなんて言語道断ですよ！！」
けれども。
彼女はそんな先生を、美しい顔に似合わない恐ろしい形相で睨みつ

ける。

「うるさいわね、だからそれどころじゃないって言ってるの！！！」

そう言葉を投げかけられた瞬間。

１８歳の女の子のあまりの剣幕に圧倒されてしまい、先生は何も言えず、へなへなとその場に座り込んでしまった。

そんな可哀そうな先生をおいて、私は彼女に手を引かれるまま外へと出て行きました。

……ごめんなさい、先生。

後で今日の分の授業、きちんと受けますから。

それに、彼女に逆らえる人間なんて、そうそういないはず。

もちろん私も、その中の一人。

私はされるがままに彼女に連行される以外に道はない。

大輪の薔薇のように咲き誇る美貌と、色香を漂わせたこのお方。

だって彼女は、この国の第１王女、マリア様なのですから。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

マリア様は私をご自分の部屋まで連れてきて、扉を閉めるや否や私

を思いっきり抱きしめてきました。

「う、ぇ、えっ！？！？！？！？」

え、なに、いきなりの熱い抱擁ですか！？

ちょ、べ、別に嫌だとかそういうのはないし、全然大丈夫なんだけど。

とにかく息が苦しい。

「……う、く、苦しい」

私の顔に二つのおっきなメロンが、これでもかってぐらいに押し付けられてるから。

私よりも年下なのに、正直羨ましい。

どうせ私はみかんレベルなんだから…。

ってひがんでる場合じゃない。

本当の本当に、これは窒息死しかねる勢い。

私が慌てて体中をジタバタさせると、ようやく彼女の手が緩んでくれました。

けど、一息つく間もなく。

「大丈夫！？まだ、変なことされてない！？」

今度は私の体を勢いよく掴むと、まじまじと見つめ、涙目になりながらそう尋ねてきた。

…状況は全く分からいないけど、どうやらマリア様は私の身を、相当案じていたみたい。
顔には焦燥の色が漂っているし、本気で心配してくれているって分かった。

だから、私はそんな彼女を安心させるべく、努めて明るい声で返した。

「あー、その、はい、大丈夫です。変なこととかは特には…」

強いて言うなら、マリア様が突然部屋に乱入して、連れ去ったことぐらい。
だからそんなに心配しないでください、それにしても一体どうされたんですか？

…と、続けようとした私だったけど、残念ながら次の台詞は言葉にならなかった。

なぜなら。

私の返答に安心したのか、彼女は安堵のため息を漏らすと、再び私を抱き締めたから。

それも、さっきよりも強く……。

「よかった、すごく心配したんだよ！？」

そして私は、再度窒息地獄に陥りました。

17　本当に、どこからそんな話が！？

それからどれほどの時間が経ったのだろう。
ようやくマリア様が落ち着かれた頃。

私はもう、息も絶え絶えでした。

……危なかった、三途の川が見えた。
向こう岸で手を振っていたのは、間違いなく私の亡き父と母だった。
このまま意識を手放したら、あっち側に行くのかなぁ、なんて考えて、ふっと途中で我に返ったのだ。

「ごめんなさい、つい取り乱しちゃって…」

マリア様が、申し訳なさそうにそう口にする。

「いえ、そんな、気に、しないで、下さい」

私はなんとか呼吸を整えながらそう答えると、彼女の差し出してくれた水を、遠慮なく口に入れる。

……ふう、私の方も、ようやく落ち着いたみたい。

その場で軽く深呼吸して呼吸を整えると、私は改めて王女様に向き合いました。

「…それにしても、あんなに慌てられるなんて、一体何があったんですか？」

すると彼女は、顔を上気させると、私に迫ってきました。
おー、マリア様のどアップ…肌はきめ細かいし、目はぱっちり二重で大きいし、睫毛はくるんと上向きで長く。
やっぱり王女様は超絶美人だなぁ、なんてのんきに見惚れている私とは対照的に、彼女はえらく切羽詰まった様子。
「実はね、さっきある情報が私の耳に入ってきたの。それで急いで事の真相を確かめたくて」
それから、今度は急に小声になると、誰にも聞かれたくない秘密話をするかのように私に語りかけてきた。
「エリさん、嘘付かないで、本当のことを言ってね」
緊張したマリア様の面持ちに。
ごくり。
自然と喉が鳴るのを感じる。
マリア様がここまで神妙な顔をされるなんて、よっぽどのことに違いない。
どんなことを聞かれるのかわからないけど、きちんと正直に答えよう。
私はそう思いながら頷くと、マリア様の次の言葉を待ちました。
すると、彼女の口から飛び出したのは。

「アレクがエリさんを襲ったっていう話を聞いたんだけど」
「……」
……は？
今、なんと？
誰が？アレク王子が。
誰を？私を。
何する？襲った。
襲う、おそう、オソウ……。
私は一瞬、言葉の意味がわからなくて、頭の中で反芻し、噛み砕き、それから少しして。
ようやくその意味を悟りました。
瞬間、体内の血液が一気に沸騰したかのような感覚に襲われた。
「！？！？！？」
いや、その、えっと、あれ、あ、う、そんな、えぇ！？！？
そ、そ、そもそもそんな事実はないし、一体どこからそんな話になるんだ！？！？
「で、それは単なる噂よね？というか、噂であってほしんだけど」
「当たり前じゃないですか！！！」

私は力いっぱい叫びながら否定しました。

「本当に！？エリさんが寝ている間とか、そういう可能性は！？」

だけど、彼女は食い下がるように尚も私に尋ねてきた。

普通はそう言う可能性もあるよね、うん。

けれど私の場合は、それは当てはまらない。

だって。

私は苦笑すると、目の前のマリア様になぜそれがあり得ないかを伝えました。

「マリア様もご存じのはずでしょう。それがいかに危険か」

すると彼女も分かったらしく、同じく苦笑いになりながら、ああ、確かにといった感じで頷いた。

以前、マリア様と2人で、パジャマパーティーをしたんだけど、その時に嫌というほど彼女は思い知ったらしいのだ。

私の寝相の悪さを。

寝ている私に悪戯しようとしたら逆に返り討ちにされて（私に記憶はもちろんない）、ベッドから突き落とされたらしい。

「アレク王子は、常に身の危険に晒されていますから、そんな危ないこと、しないと思います」

胸を張って言えることではないけど、事実だから仕方がない。
だって……時々、朝起きると、アレク王子がベッドから転がり落ちてることがあるし、打撲の跡が体についてることもあるから。

主に私のせいで。

そんな私に、アレク王子が手を出せるはずがないのだ。
そしてそれほどな目に遭いながらも、一緒に寝ようとするアレク王子に、私は一種の尊敬の念を覚える。

私は上昇した体温を元に戻すべく、水を体内に入れると、浮かんだ疑問を口にした。

「それにしても…なぜ急にそんな話が出て来たんですか？？？」

マリア様は、私がここで一番気を許せるお友達。
私とアレク様がそういう大人の色々は未経験ってことも知っているはずだし、仮に仮に万が一そういうことがあったら、私はいの一番にこのお姫様に報告するだろうに。

すると彼女は、アレク様と同じ青色の瞳に、困惑の色を浮かべました。

「あー、うん、実はね、さっき侍女の一人からある話を聞いたの」
「一体どんな話ですか？」
「その子が言うには、今朝方、廊下で、アレクとエロ大魔王のハーベイが会話してたらしいんだけど。その時に、どうやらそういう類の話をしていたそうなの。全部の会話は聞こえなかったんだけど、聞こえてきた単語が、その、エリさんをどうこうする、みたいな内容だったらしくて。それで、私心配になって駆け付けたの」

「……私はこの通り無事ですので」
「それじゃああの子の聞いた話を一体、なんだったのかしら」
嘘を言う子ではないのだけれど。
そうマリア様はぶつぶつ呟くと、何か考えるように下を向きました。
…かと思ったら、急にがばっと頭を起こすと、とてつもない推測を飛ばしてきたのでした。
「……もしかして、アレクはエリさんを今夜にでも襲うつもりなんじゃないかしら」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6916z/

私と年下王子サマ

2012年1月15日03時45分発行